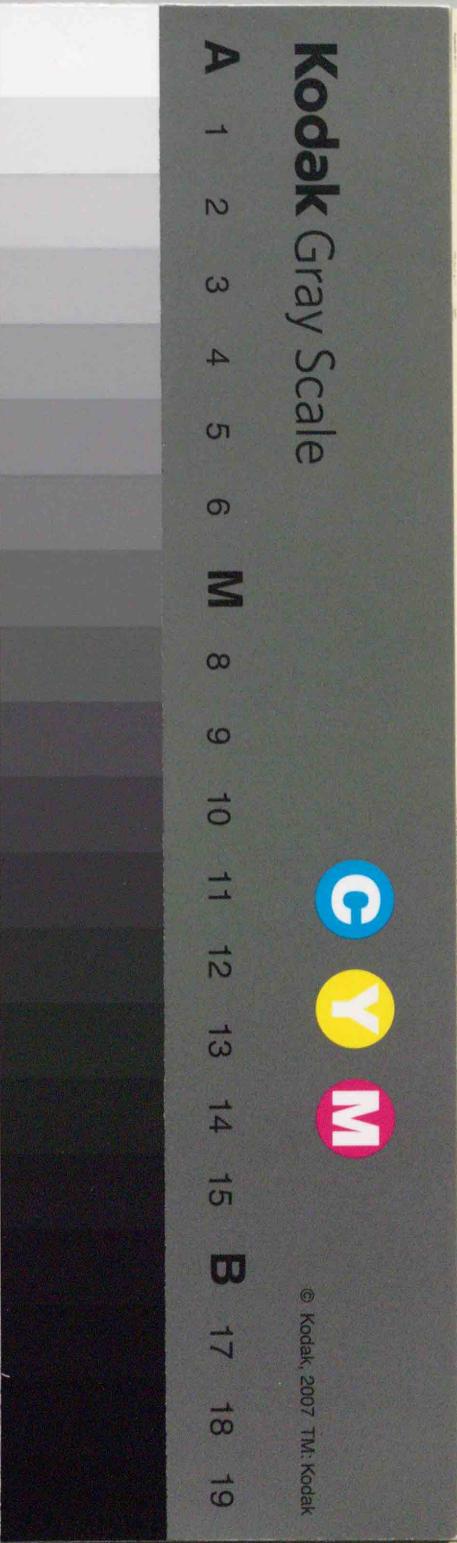
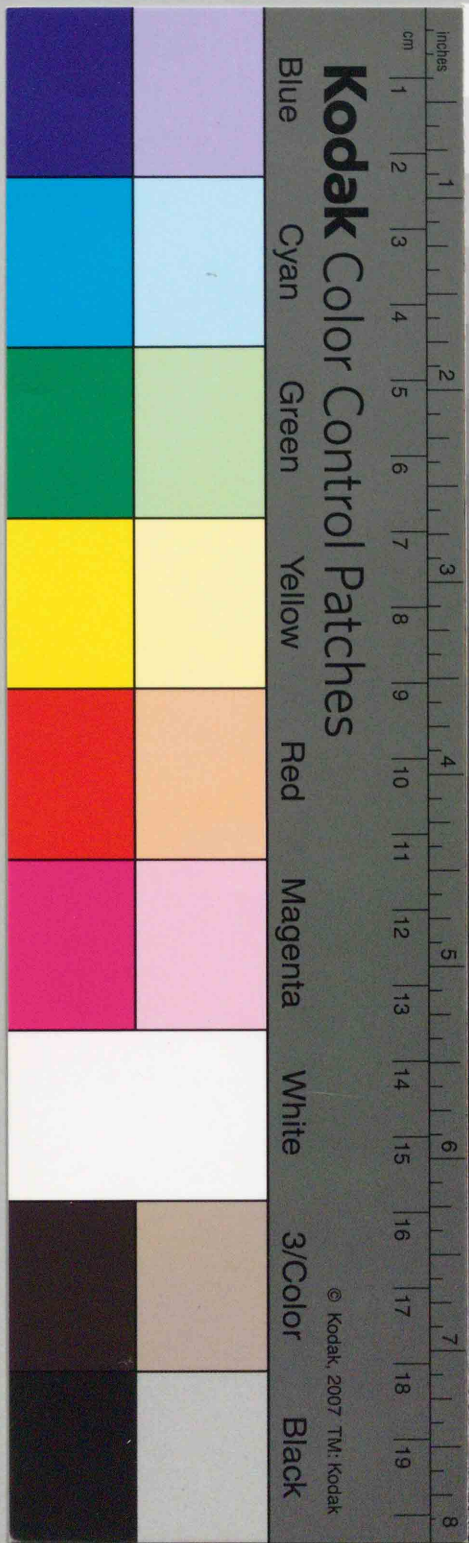
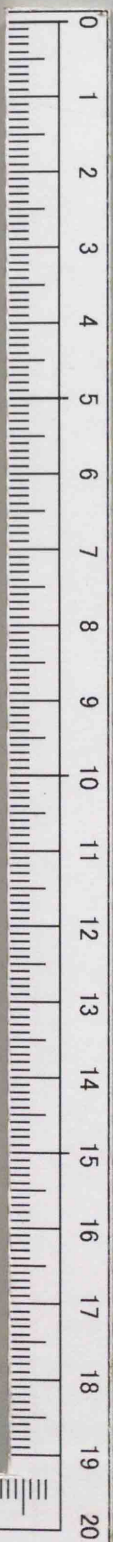


中等國語讀本

新修二版

卷五

4a
810
B5



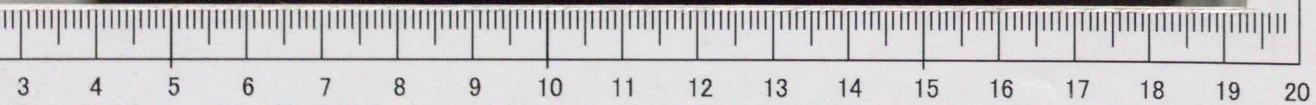
41645

教科書文庫

4
810
41-1930
20000
90665



© Kodak, 2007 TM: Kodak



日九月十年五和昭
濟定檢省部文
用科語國校學中

中等國語讀本

新修二版



編者

金子直臣
落合文直

資料室

4a
810
AB5



綠新四

祭茂賀

卷五目次

一 日本 <small>の</small> 國號	大森金五郎	一
二 御製と教育	芳賀矢一	六
三 わが世をまもれ <small>(和歌)</small>		二二
四 新緑	池邊義象	二五
五 淡路島 <small>(俳句)</small>		二〇
六 花の譜	幸田露伴	三三
一、梅		三三
二、雪 團		三四
三、芙		三四
四、朴		三六

五、瞿 麥……………二七

七 准后親房……………二六

八 論語小解……………二五

九 忠度と俊成……………二四

一〇 藝苑逸話……………二七

一、繪佛師良秀……………二七

二、烏羽僧正……………二六

一一 道程を愛する心……………二五

一二 心の耳……………二五

一三 一寸法師……………二六

一四 曼珠沙華(和歌)……………二六

一五 鹽 原……………二六

尾崎紅葉……………二六

澁澤榮一……………二六

(平家物語)……………二四

(古今著聞集)……………二六

鶴見祐輔……………二五

北原白秋……………二五

(伽草紙)……………二六

(十訓抄)……………二七

一六 夏目先生におくる……………二七

一七 そぞろ言……………二七

一、雪の朝……………二七

二、青き眼……………二七

三、賤しげなるもの……………二八

四、見ぬ世の友……………二八

五、二つの矢……………二八

一八 小園の記……………二八

一九 事實と學說……………二九

二〇 學者の苦心……………二九

二一 蘭學事始……………二九

二二 椰子の實(新體詩)……………二九

芥川龍之介……………二七

(徒然草)……………二七

……………二七

……………二七

……………二七

……………二八

……………二八

……………二八

正岡子規……………二八

丘 淺次郎……………二九

芳賀矢一……………二九

菊 池 寛……………二九

島崎藤村……………二九

二三 世界的市民……………德富蘇峯…二五

二四 鷺江の月明……………佐藤春夫…二三

二五 長江湖航……………德富蘇峯…二〇

二六 扇の的……………(平家物語)…二六

二七 光……………吉田絃二郎…二四

二八 空ゆく雁……………(會我物語)…二五

二九 路傍に寝てゐる青年……………坪内逍遙…二二

(附録) 助辭表 (文語口語對照)

(終)

中等國語讀本 新修二版 卷五

一 日本の國號

我が國は古くは大八洲美稱の國と稱へられた。これは海中に數多の島島が散在して居る所を形容して稱へたものであらう。大八洲といふのは大彌島ミヤの義で、必しも八といふ意味ではない。即ち洋洋たる海中に數多の島島のある所から、かく稱へたものと思はれる。

又葦原の中助詞(の)つ國といふ名稱もある。これは太古に於いて、この國の四方に蘆の生ひ茂つてゐた所から、その蘆葦の中にある美地を賞讚した言葉であらう。又豊葦原美稱の中つ國とも瑞穂の國ともいふ。

葦原
葦原
葦原

瑞穂とは水田があつて稲の生産が豊かでその穂の美麗なのを稱へたのであらう。尙多くの形容詞を添へて、豊葦原の千五百秋の瑞穂の國、又は萬千秋の長五百秋の瑞穂の國などと美稱することもある。千秋萬歲、國土の豊かなのを意味したことを想はれる。又秋津



大森金五郎

洲とも豊秋津洲ともいふことがある。秋津は蜻蛉の臂咄の略で、これは神武天皇が國見をなされた時、蜻蛉の臂咄せるが如しと仰せられたのから起り、もと大和

一國の名であつたのが、後日本全國の名となつたのであらう。又敷島とも敷島の倭ともいふ。これは崇神天皇が磯城に都せられてから起つたことと見える。敷島の倭も畿内一國の名であつたが、後には日本全體の名となつたのである。尙、その外にも伊弉諾尊は、我が

蜻蛉の臂咄云
日本書紀に出づ。

崇神天皇
第十代。

磯城
奈良縣磯城郡三輪町金屋に磯城瑞籬宮址あり。

魏志
三國志の一。晉の陳壽の撰。
前漢書
後漢の班固の撰。

國を稱して浦安國、細戈千足國、磯輪上秀眞國などと稱へられたこともある。大國主命は玉墻内國といひ、饒速日命は天の磐船に乗つて大空からこの國土を見て、虚空見日本國と稱した。支那の書には我が國の事を倭と稱へ、魏志倭人傳及び前漢書の地理誌にも、日本人を稱して倭人といひ、その後の書物にも、倭人、倭國等の文字が見えて居る。かくの如く様様な名稱はあるが、神武天皇が大和に幸せられて、それから代代の天皇が十數代、なほ大和地方に都せられたので、大和は日本全體を指す名稱となり、大和といへば日本國といふやうになつて來た。さて漢字が傳はつて後、この大和といふ言葉に漢字を當てはめることになつて、通常、倭、大倭などを用ゐ、又は東方に在る國といふ所から、單に東の字を「やまと」と讀ませ、或は日本即ち日の本(日の出づる國)などといふ意味の文字を書いて、これを

日出づる處云
推古天皇の朝、
隋に贈られし國
書の句。日本書
紀に出づ。

日本書紀
元正天皇の朝、
舍人親王、太安
萬侶の撰。

「やまと」と讀ませたこともある
そこで、日本といふ國號の由來に就いては古來様様の説がある
が、やはりもとは「やまと」といふ言葉に日本といふ字を當てはめた
のが根元であらう。我が國の天皇の御事を「日出づる處の天子」支那
の皇帝のことを「日の没する處の天子」などと書いたこともある。こ
の日の出づる處といふことが即ち日本といふ意味であつて、初は
日本と書いても「やまと」と讀んだのであらうが、遂に音讀するに至
つて、今日の國號となつたものと見える。然らば何時頃から日本と
いふ文字を用ゐ始めたかといふと、それは判然とはわからない。或
は大化の改新の時に、外國に對して、詔書に「日本天皇」と書いたとい
ふ説もあり、或は日本書紀撰定の時にさういふ文字を定めたので
あるといふ説もあるが、恐らくは國家がこれを制定する前に、既に

せし

な
せ

勅
の
運用

カ
サ
変

す
る

世
し
す

な
の
そ

新
の
そ

ニ
リ
ク

大森金五郎
歴史家。千葉縣
の人。國學院大
學教授。

は
ま
の
そ

歸化人等が「やまと」といふ言葉に様様な漢字を當てはめた中に、日
本といふ文字が、最も我が國の名義を現はすのに適當であるとい
ふ所から、自然に廣く行はれ、遂に我が國號にこの字を採用するや
うになつたものと思はれる。かくて畿内の大和一國を指す場合に
は、奈良時代の頃に大和といふ文字を定め、以て日本全體を呼ぶ場
合の倭若しくは大倭といふ文字と區別することとなつたのであ
る。(大森金五郎—大日本全史)

いざ子どもたは業なせる天地の

かためしくにぞやまと島根は、

末の世のすゑの末までわが國は

よろづのくににすぐれたる國。

(藤原仲麿)

(安覺禪師)

二 御製と教育

明治天皇の御製が九萬首以上もおありなさるといふことは、あらゆる點に於いて、東西古今の君主を凌駕し給ふ御盛徳の一つとして、驚歎し奉るより外は無い。わが大天皇のすべての鴻業が神業である如く、これも亦一つの神業である。文學史上から見ても、最多作の歌人といはれた家隆卿さへ、天皇に比べ奉れば物の數でも無い。歴代の敕撰二十一代集の歌の數が總計三萬數千であるが、御製はその三倍といふに至つては、實に驚くべき數といはねばならぬ。この多數の御製が、最も多事な明治の御治世に、萬機親裁の餘に成つたことを考へ奉れば、その御精力の絶倫であらせられたことは、何時の世、何處の國にも類例が無い。皇威を四海に輝かし、皇國を世

家隆卿

歌人。藤原氏。藤原俊成の門人。

一生の創作二萬餘首。(一八〇八年—一八八七年)

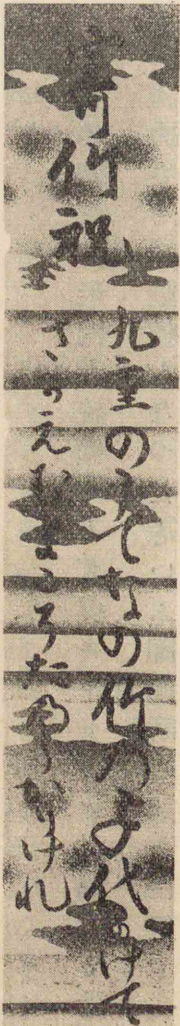
二十一代集

古今 後撰、拾遺、後拾遺、金

葉、詞花、千載、新古今、新敕撰、續後撰、續古今、續拾遺、新後撰、玉葉、續千載、續後拾遺、風雅、新千載、新拾遺、新後拾遺、新續古今。

界一等國の班にお進め遊ばした大業と共に、古來の言の葉の道に於いても、空前の偉績をお示しになつたことは、誠に億兆の欽仰し奉る所、千代萬代にかけての語草である。

御精力の絶倫にあらせられた事は、いふまでも無いが、かばかり



明治天皇宸筆

寄竹祝
九重のうてな
の竹の千代か
けてさかえむ
よこそたのし
かりけれ

多數の御製のあらせられたのは、平素何等の娛樂をも近づけ給はず、酷暑、嚴寒の時も、一度として遊幸の仰出がなく、常に宮中におはして、唯一の御慰となされたのが、即ち和歌であつたからである。これを思へば、實に恐多いことであつて、且又その神神しい御性格を、親ひ奉ることが出来る。御製を拜誦し奉るものは、一言一句これが

即ち萬機親裁の餘、御くつろぎ遊ばされた御日常の御慰安であつたといふことを拜察しなければならぬ。

そしてその數數の御製が、風調は高く規模は大きく、如何にも萬世一系の帝祚を踐ませられる上御一人の御作とうかがはれる。國を思ひ民をあはれませ給ふ大御心は、常に御製の上にあらはれて居る。

一首の御製が米國大統領ルーズヴェルト氏を動かして、講和仲裁に盡力させる動機となつたといふ御逸話の如きは、三十一文字の短歌が千萬の兵馬にもすぐれた力を示すもので、和歌始まつて以來未曾有の事に相違ない。まして六千萬の國民が日常拜誦して、自然に蒙る偉大な感化に於いては、何の經典もこれに並ぶべきものは無い。日日の御慰が直に國民教化の源泉となる。これ程の貴さ

一首の御製
明治三十七八年
戰役の際に詠ま
せ給へる「四方
の海みなはらか
らと思ふ世にな
ど波風の立ちさ
わぐらむ」の御
製をさす。
ルーズヴェルト
北米合衆國二
十六代の大統
領。(西曆一八
五八年—一九
一九年)

が何時の世、何處の國にあらうか。

明治時代の詔敕はいづれも森嚴雄大、永く國史を照らして後世の國民に聖代を語り、典範を示すものである。しかし詔敕にはそれぞれ形式があり、聖意を承けて起草する人のあることも明白であるが、御製は直に大御心の發露したもので、これを拜誦するものは、即ち直接に玉の御聲を拜聽するのである。草莽下々の人の微臣まで、日日玉の御聲を拜聽する光榮を有するのは、實に我が國民の特殊な幸福であるのである。

世には、日本文學に莊重な典籍の無いのを訴へる人がある。金言美辭、多くこれを支那の古典に仰いで、文章にも教訓にも、古代支那の言句を引證して始めて安心して居る人がある。これ等の人の思想の淺はかなことは今更いふまでもないが、かくの如き人人にも、

直に合點の行くのは即ち先帝の御製である。これが句句金玉の響を有して、いはゆる古聖賢の語にも勝ることは、何人も首肯するところである。遠く外國たる支那の聖賢に依るまでもなく、近くわが大天皇は、すべての教訓、名言を宣はせられてゐる。今より後のわが日本國が、憲法、皇室典範をはじめ、すべての模範を明治時代に求めるやうに、教化の淵源としても、大天皇の御製を奉戴して、かの教育敕語とともに、永久にあがめ奉るといふことは、如何なる國民も、否、外國の人人も、必ずしかあるべき事と賛成するに相違ないと思ふ。我等は今日まで、明治の御代に生まれて玉音を耳にしたる幸福を思ふと同時に、今後幾千萬年も、大天皇がその御製を以て國民を教化し給ふ御遺徳の盛なことを思ひやると、實にその畏さに涙がこぼれる。文學上より見ても、大天皇の御事業は偉大であるが、文學上

の價值よりも、御製の各首が、教育上より見て、萬世不朽の經典であることを思ひ奉らねばならぬ。大隈侯の國民讀本は、既にこれを以て編成の根本とした。今日の國定讀本にも、幾首かの御製を掲げてある。大正以後の教育は、孔子や孟子の言よりも、まづ明治天皇の大御心を以て國民を教化しなければならぬと思ふ。

(芳賀矢一—筆のまにまに)

陛下が政治に御熱心にあらせられたのは、驚くばかりで、民の苦樂に就いては、一入大御心を傾けさせ給ひ、衆議院の解散の奏請の如き大事件の場合には、よくよく内情を質し給ひ、萬止むを得ざる次第を見極め給はぬ中は、御裁可がなかつた。嘗て總理大臣伊藤博文が辭表を上つた時、陛下は、卿等は辭表を出せばそれで濟むべきも、朕は辭表は出されぬと宣うたとか。(高島平三郎)

大隈侯
名は重信。明治の功臣にして政治家。大正十一年一月薨す。(二四九六年—二五八二年)
孟子
名は軻。支那の大賢人。(西曆前三六五年—前二八五年)
芳賀矢一
國文學者。文學博士。福井縣の人。國學院大學學長。東京帝國大學名譽教授。昭和二年二月歿す。(二五二七年—二五八七年)

三 わが世をまもれ (明治天皇御製)

くににりよちかほしむるは
 けしをまもるはのちかほ
 ちかほのちかほにちかほ
 ちかほのちかほにちかほ
 ちかほのちかほにちかほ
 ちかほのちかほにちかほ

あかきふくしにちかほのちかほ
 ひろきふくしにちかほのちかほ
 さきのちかほのちかほのちかほ
 ちかほのちかほのちかほのちかほ
 ちかほのちかほのちかほのちかほ
 ちかほのちかほのちかほのちかほ
 ちかほのちかほのちかほのちかほ

あまのなごはたにちりあふ

枕詞 母の歌

たらしむるものもいづれもなほ

あまのなごはたにちりあふ

あまのなごはたにちりあふ

あまのなごはたにちりあふ

あまのなごはたにちりあふ

あまのなごはたにちりあふ

四 新緑

白樫の若葉の露を帯びたるに、月のさしたるはいふべくもあらず。檜柏などの茂り合ひたるが、風に吹かれてその葉の靡き合ひたるは、葛の葉の秋さへ思ひやられてをかし。楓の青青とはえたる、まして庭などに植ゑられたるが赤き芽を勻はせたるは、愛嬌こぼるる少女を見る心ちぞする。藤の葉の長う伸びて棚をおほへるは、花の春のゆかりも思ひおこされ、櫻の若葉の柔かなるには、眠れる蝶の夢さへおしはからる。

榎、楠、鴨脚樹などの高く大きなるが茂り合ひたるは、殊に人の心を清うするものなるが、賀茂の祭のこの下蔭に行はるるは、神神しさも花やかさも添ひて、初夏の氣色はここに盡きぬべくぞ思はる

心ちぞする

銀者

賀茂の祭
京都府賀茂神社
の祭。古は四月
の中の酉の日に
行へり。

ありあり
ありありあり
ありありありあり
ありありありありあり
ありありありありありあり



扇骨木

ことぞかし

立つことやす
き花の蔭かは
古今集春下に出
でたる、凡河内
躬恒の歌にて、
その上句は「け
ふのみと春をお
もはぬ時だに
も」なり。

るやうなり。青色は昔より春の色といひ傳へたれども、まことは初
夏のもてくる色なりけり。

薄の葉、麥の穂、柵の枝さへこの頃までは手を切るとも見え
八手の葉のなやかなるを取り來りて頬におし當つれば、ひやひ
やと心ちよく、扇骨木の若葉つまみ取り口にくはふればそのさは
り柔かに、甘き汁さへ出できぬ、いとなつかし。桑の葉の蠶にくは
るるもこの頃のことにして、茶の芽の争ひ摘まるるも昨日今日の
ことぞかし。

「立つことやすき花の蔭かは」と、古人の歎きけんもさることなが
ら、この柔かなる青葉に月影日影のさし添ひたる、いかで花の春に
劣るべき。まして時鳥一聲雲を破れば、緑の色も一しほ加はり、こぼ
るる露も青む心ちするをや。

ほととぎす青葉もりくる一聲に

花にねし夜の夢はさめてき。(池邊義象)

草と蟲さへ無かつたら田園の夏は本當にいいのだが、と愚癡をこぼさ
ぬことは無い。然し實際眼前に草の跋扈を見れば、取らずにはゐられぬ。
隣の畑が綺麗なのを見れば、こちらの畑を草にして、草の種を鄰に飛ば
しても濟まぬ。そこで又勇を鼓して草を取る。一本又一本、草の種は限な
くとも、取つただけは草が減るのだ。手には畑の草を取りつつ、心には心
田の草を取る。心が畑か、畑が心かとにかく草が生え易い。油断をすれば
畑は草だらけである。我等の心も草だらけである。あたりの社會も草だ
らけである。我等は世界の草を取り盡すことは出来ぬ。取り盡すことは
又我等人間の幸福でないかも知れぬ。然し捨て置けば我等は草に埋も
れてしまふ。そこで草を取る。我が爲に草を取るのだ。生命の爲に草を取
るのだ。敵國外患なければ國滅ぶで、草が無ければ農家は墮落してしま
ふ。(徳富蘆花)

池邊義象

國文學者。藤園
と號す。熊本の人。
御歌所寄人。
大正十二年歿
す。二五二年
一五八三年)

井上士朗

俳人。名古屋の人。加藤曉臺の門。文化九年歿す。(二四〇〇年—二四七二年)

五 淡路島

○

月高くかりがねひくし淡路島

露に音あり誰住みなれて茶の煙

井上士朗

秋の夜の明てもしげし月夜かな 士朗

鈴木道彦

俳人。仙臺の人。加舎白雄の門。文政元年歿す。(二四一四年—二四七八年)

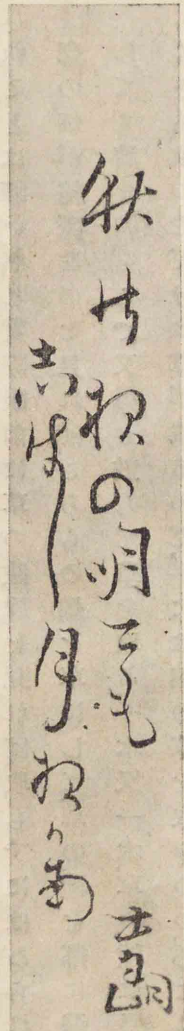
夏目成美

俳人。江戸の人。文化十三年歿す。(二四〇七年—二四七六年)

○

ゆさゆさと櫻もて來る月夜かな

○



筆朗士上井

鈴木道彦

夏目成美

建部巢兆

俳人にして畫を善くす。武藏の人。文化十年歿す。(二四七三年)

川村碩布

俳人。武藏の人。白雄の門。天保四年歿す。(二四〇一年—二四九一年)

いつくれて水田のうへのは

この月ののゝ小家かたうがらし

蒼虬華押

小林一茶

俳人。信州柏原の人。通稱彌太郎。俳諧寺と號す。滑稽酒脱獨自の風を立つ。文政十年歿す。(二四二三年—二四八七年)

東海道のこらず梅となりにけり

○

建部巢兆

菜の花に染めても見たし富士の山

○

川村碩布

土藏賣れて日あたりのよき牡丹哉

○

小林一茶

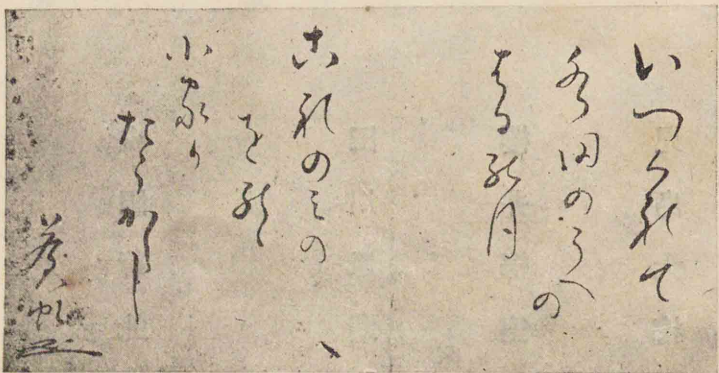
のどかさや淺間のけむり晝の月

やせ蛙負けるな一茶これにあり

やれうつな蠅が手をする足をする

旅人や山にこしかけてところてん

露ちるやおのおのあすは御用心



筆虬蒼田成

成田蒼虬

俳人。加賀の人。

關東の門。天保

十三年歿す。(二

四二〇年—二五

〇二年)

田川鳳朗

俳人。道彦の門。

天保二年歿す。

(一四〇八年—

二四九一年)

櫻井梅室

俳人。金澤の人。

關東の門。嘉永

五年歿す。(二四

二九年—二五一

二年)

兒島大梅

俳諧漢詩を善く

す。江戸の人。

天保十二年歿

す。(二四三二年

—二五〇一年)

名月や江戸のやつらが何知つて

大根ひき大根で道を教へけり

成田蒼虬

櫻もちて人はかへるに旅のそら

すずしさや牛も根笹に繋がれて

田川鳳朗

鶯にふまれて浮くや竹柄杓

櫻井梅室

名月や草木にをどる人のかげ

兒島大梅

鰻食はぬ人にはいはじ鰻の味

六 花の譜

一 梅



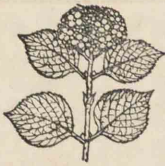
幸田露伴

梅は野にありても山にありても、小川のほとりに在りても、荒磯の隈にありても、音にその花の美しく香の清きのみならず、あたりのさまをさへゆかしき方に見するものなり。崩れたる土屏、歪みたる衡門、あるは掌のくぼほどの瘠畑、形ばかりなる小社などの常は眼にいぶせく心に飽かぬものも、この花の一木二木立ちまじりて咲き出でなんには、をかしきものとぞ眺めらるる。たとへば、徳高く心清き人の、如何なる處にありても、その居る處の俗には移されずして、却りてその俗

ものとぞ眺めらるる

出師の表
諸葛亮の、蜀の
後主に上れるも
の。前後二表あ
り。安子順いふ、
「讀出師表、而
不墮涙者、其
人必不忠」と。

雪團



らふべくや
(あらむ)
巖桂



を易ふるが如し。出師の表を讀みて涙を墮さぬ人はなほ友とすべし。この花好まざらん男は奴とするにも堪へざらん。

二、雪團

雪團は紫陽花に似て心多からず。初は淡く色あれどやがては雪と潔くなりて終る。たとへば聊か氣質の偏りたる人の年を積み直に進みて、心ざま純く正しくなれるが如し。遠く望むも好し、近く視るも好し。花とのみいはんや、師とすべきなり。

三、芙蓉

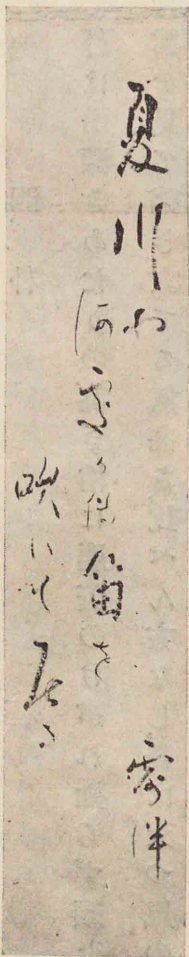
芙蓉は花の中の王ともいふべくや。おのづから具はれる位高く、徳秀でたり。香は遠くわたれど、巖桂、瑞香、薔薇などのやうにさし逼りたる如き趣なく、色は勝れて麗しけれど、海棠、牡丹、芍薬などのやうに媚き立てる方にはあらず。人の見るを許して狎るるを許さざ

瑞香



夏川や何處か
で笛を吹いて
居る露伴

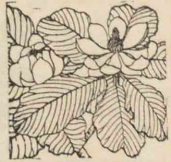
る風情、また儔なく尊し。暁の星の光の薄るる頃、靄霧立ち罩むる中に開く音する、それと姿を見ざるうちより、はや人をしてあこがれしむ。雲の峰忽ち崩れて、風ざわざわと高き樹に騒ぎ、空黒くなるやがて、夕立つ雨の一しきり降り來るに、早くも花を閉ぢたる賢さ、大



筆伴露田幸

智の人の機に先立ちて身を取り置き、變に臨みて悠悠たるにも似たり。散り際も蒼の時も好く、散りての後一ひら二ひら細波に身を任せて、動くとも動かぬともなく水に浮べるも面白し。花ばかりかは、葉の浮きたる、卷きたる、開き張りたる、破れ裂けたる、枯び果てたる、皆好し。茄の緑なせる時、赭く黒める時、いづれ好からぬは無く、蜂

いくたりかあ
らん



朴の花

の巢なせるものも見て趣なからずやは、この花の涼しげに咲き出でたるに長く打ち對ひ居れば、わが花を觀る心地はせで、わが花に觀らるる心地し、顧みてさまざまの汚を帯びたるわが身のかひなく口惜しきを覺ゆ。この花を愛づるに堪ふべき人、そも人の世にくたりかあらん。

四、朴

朴は山深きあたりの高き梢に塵寰のけがれ知らず顔して、ただ青雲を見て嘯き立てる氣高さ、比べん方なし。香は天つ風の烈しく吹くにも壓されず、色は白壁を削りたればとて、かくはあらじと思はるるまで潔きが中に、尙暖かげなる趣さへあり、瓣は一重なれど思ひ切りて大きく咲きたる、なかなか八重なる花の大いなるよりめざまし。心のさまも世の常にあり觸れたるものとは差ひて、仙

武帝
前漢第五代の天子。雄材大略あり、四方を征して國威を輝かせり。(西曆前一五七年—前八七年)

誰か—起さざるべき

幸田露伴
文學博士。名は成行。東京の人。慶應三年七月生まる。嘗て小説家として紅葉と並び稱せられしが、今は隨筆の著作多し。

女の冠などにも爲さば爲すべき花の面影、かうがうしく貴し。この花を瓶にせんは、ただ人の堪ふべきにあらず。まづは漢にて武帝、わが邦にて豊太閤などこそ、これを瓶中の物となし得べき人なれ。

五、瞿麥

瞿麥は野のもの勝れたり、草多く茂れるが中にこの花の咲きたる、或は水乾きたる河原などに咲きたる、道行く者をして「優しの花や」と獨言たしむ。馬飼ふべき料にとて、賤の子が刈りて歸る草の中に、この花の二つ三つ見えたるなど、誰か歌心を起さざるべき。

(幸田露伴—隨言)

梅の風骨たること、水陸草木の中に似たるものはあらじ。十月一陽の氣に燦燦たる江南の玉妃まづ笑めるより、生涯を物好きに苦しみ、風流の細みに終る。……蓮は美しき所少し。例へば上手の繪にかける人の顔にひとし。どこやら佛めきて心こそあかるれ。(森川許六)

七 准后親房

吉野朝六十年の間は、國史において精彩を放つところ、忠勇義烈の士が殉國の美譚今に盡きず。楠木正成父子を出し、新田義貞一族を出し、菊池氏を出せり。

親房公は具平親王の裔なり。伏見天皇の正應五年に生まる。後醍醐天皇の信任を蒙りて大納言に進み、世良親王の傳となれり。然るに親王不幸にして元徳二年薨じ給ひければ、公はわが世盡きぬる心地して、官を罷め剃髮して宗玄と號しぬ。帝を始め朝野惜しまざるものなし。公の建武中興の際に斡旋せし事蹟は、更に史籍の徴すべきものなしと雖も、中興の後また出仕して従一位に叙せられ、大臣に准ぜられしを見れば、その決して無爲ならざりしことを知るべし。ただ九重雲深くして、世間にその消息を漏さざりしのみ。

具平親王
村上天の皇子。
後中書王と稱す。
(一六二三年—一六六九年)



北 親 房

建武中興の後、間もなく公武の軋轢は起れり。護良親王の英邁なる、夙に足利尊氏の奸謀を察して、これを除かんことを謀り給へり。新田、楠木等は固より宮の身方なりしならん。然れども、更に親王の黒幕として計策を運らせ一箇の人傑ありき。これ親房公なり。案ずるに、親王の御母は公の祖父大納言源師親の女にして、親王の妃は公の妹なれば、公と親王との結託深きは、これにても推し量らるべし。もし後醍醐天皇にして、親王と公とに聞きて果決の手段を取らせ給ひなば、よし尊氏を除くこと能はずとすと

も、その肘を掣して決して跳梁することを得ざらしめしならん。親王の慘死は親房公の爲に、建武中興の爲に一大打撃なりき。

元弘三年十月、親房公の男顯家陸奥守に任ぜられ、義良親王を奉じて陸奥に赴く。顯家歳十七、公これを伴ふ。實に東國經營の大規畫にして、廟謨のある所歴歴見るべく、而してその建議は必やこの公の方寸に出でしことと想はる。尊氏叛するや、公は顯家と共に義良親王を奉じ、奥羽の兵を率ゐ、電馳して西上し、新田義貞等と合して大いに尊氏を破り、鎮西に奔らしむ。延元元年十二月、帝神器を奉じて吉野に幸し給ひ、綸旨を四方に下して勤王の義士を招き給ふ。時に公はその子顯信と共に伊勢にあり、伊勢、志摩、紀伊を經略し、水軍を興し、大湊を以て東國交通の關門となし、東西相通じて京師を恢復し、建武中興の大業を復せんとせり。

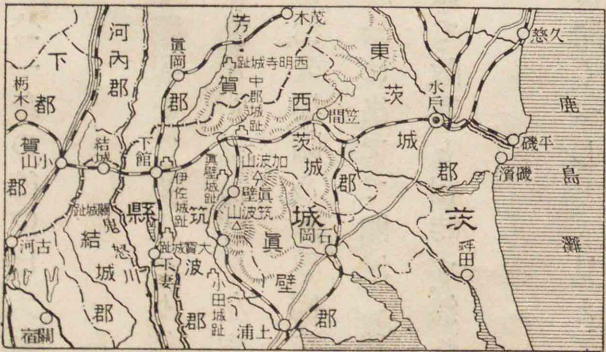
大湊
三重縣度會郡

藤島
福井縣吉田郡

とぞ聞えし

小田城
茨城縣筑波郡

然れども吉野朝廷の形勢振はず、延元二年五月、顯家和泉の石津に戦死し、閏七月、義貞また越前の藤島に戦死す。龍虎の兩將殆ど同時に亡び、吉野朝廷はその股肱を失へるさへあるに、延元四年八月には、後醍醐天皇南山雲深き所にて崩御あらせ給ひけり。御年五十又二とぞ聞えし。時に公は常陸の小田城にあり、この悲報に接しては、萬斛の涙落ちて逆旅の雨とやなりにけん。後村上天皇立ち給ふに及びて、公は身東國にありて、なほ先帝の顧命と新帝の依託とによりて、遙に政務を興り聞けり。獨、吉野朝廷のみならず、海内の官軍は公を中心とし、骨子として、これを仰望すること衆



衆星の云云
論語に、「爲レ政
以レ徳、譬レ如テ北
辰居テ其所、而衆
星共レ之。」

結城親朝
宗廣の子。(一
〇四二年)

小田治久

(一〇二〇二年)

關、大寶、伊
佐、眞壁、中
郡

共に茨城縣眞壁
郡。

西明寺

栃木縣芳賀郡。

楚歌四面に起
る

史記、項羽本紀
に、「項王軍壁ニ
垓下、兵少食盡、
漢軍及諸侯兵
圍レ之數重。夜

星の北辰に向ふが如く、九州の阿蘇氏も、關山幾百里の遠きを辭せ
ずして、成敗をこの人に請ふに至れり。げにや公一身の徳望は大に
して、その任も亦重からずや。

常陸における公は、最も苦心慘澹、あらゆる艱難を嘗め盡せり。結
城親朝を獎めて百方兵を出さしめんとせしかども、親朝言を左右
にして更に應ぜず。加ふるに小田の城主小田治久異圖あり、興國二
年十一月、遂に敵を城中に導けるを以て、親房公は出でて關城に移
り、大寶伊佐、眞壁中郡、西明寺の五城をつらねて敵軍と相峙す。然れ
ども形勢日に益非なり。

興國の年號ありと雖も、吉野朝の運いまだ開くべしとも見えぬ。
雲南山に深うして、天つ日の光八紘に照り渡らず。まして關城の夜
雨蕭蕭として、羈愁を催す時、楚歌四面に起る。しかも、公はなほこの

開ニ漢軍四面皆
楚歌ニ項王乃大
驚曰漢皆已得
レ楚乎、是何楚人
之多也。

職原鈔

二卷。歴代、官職
の沿革および補
任の次第を述べ
たり。

臥雲日件録

七十四冊。北禪
和尚の著。

前の三房

大江匡房。藤原

長房。藤原伊房。

後の三房

源親房。藤原宣
房。源定房。

三内口訣

一卷。一名三光
院内府記。三條

西實澄の著。

尺素往來

二卷。一條兼良
の著。

間において胸中綽綽たる餘裕ありて、嘗て草せし神皇正統記を増
補訂正したり。神皇正統記は國文にて物せる國史の上乗なるもの
にして、筆を神代に起して後村上帝の興國年間に及ぶ。著述の意、一
に名分を正し、正閏を分たんとするにあり。その議論は堂堂として
極めて公平に、興亡成敗を論じて識見卓拔なり。公は有職故實の道
にも明なれば、さきに後村上天皇の立ち給ふや、兵馬倥傯の際、職原
鈔を草してこれを吉野朝廷に上れり。その博學洽聞なることは、臥
雲日件録には、前に三房あり、後に三房あり」と稱し、三内口訣には、宏
才博覽、世の推すところ」といひ、尺素往來には、資治通鑑、宋朝通鑑等、
人人博くこれを受く。特に北畠入道准后蘊奥を得らる」とあり。その
世人に推服せられしこと見るべし。

興國四年十一月、關、大寶の二城遂に陥り、伊佐城も亦尋いで降り

ければ、常陸の野また南軍なく公が五年の辛勞、一朝にして水泡に
歸し、公は心ならずも海路伊勢に還りぬ。吉野の行宮に、一夜君臣慷
慨の涙にくれて、更の闌くるを覺えざりしならん。

志摩、伊勢、紀伊は公が久しく撫養したる水軍の根據地なり。熊野
の水師精銳にして、練熟を以て名あり。公乃ちこれらの水軍をして
遠く西に向はしめ、四國、中國の官方と連合して、九州の沿岸および
薩摩を抄掠して九州の官方を援け、奇功を沿海に奏せり。公が准后
の殊遇を蒙られたるはこの間のことなり。

正平七年二月、官軍、京都を攻め、足利義詮を近江に奔らす。公乃ち
京都に入り、諸成敗を掌り、持明院流の三上皇を奉じて、河内の東條
に遷せり。この間、東國にありては、新田義宗、義興等、兵を起して、尊氏
を破り、東西相期して、吉野朝廷は掉尾の勇を奮へりと雖も、東國は

足利義詮
(一九九〇年—
二〇二七年)

三上皇

光嚴院、光明院、
崇光院。

新田義宗

義貞の第三子。
(一〇二〇—二〇二七年)

義興

義貞の第二子。
(一一〇一—二〇二二年)

催勢

壯舉中頃にして敗れ、西方亦長く驚天動地の偉業を續くること能
はず。義詮、近江より來り犯すに及びて、官軍支へず、八幡の籠城とな
り、糧まさに盡きんとして遂に没落しぬ。八年六月、再び京都を恢復
したりと雖も、四方、催促に應ずるもの少く、來り降るもの亦稀にし
てこれを守ることに能はず。九月、また京師を失ひぬ。歎すべきかな。

正平九年四月、親房、公大和の賀名生に薨ず。歳六十有二。春、老いて
花既に落ち、絶代の忠魂、また天に歸しぬるぞ悲しき。ああ、吉野朝六
十年の久しき、僅に大和の邊隅に天子を奉じながら、京師の精兵に
抗して甚しき挫折をなさず、王事に勤むる士心を鼓舞して能く義
故を糾合し、足利氏をして寒心せしめしもの、實に公が忠義の精髓
を得たりし故にあらずや。子孫また君家に盡して、能く乃父乃祖の
遺風を存するもの、ひとしく欽すべきなり。

賀名生

奈良縣吉野郡。

歸しぬるぞ

悲しき

八 論語小解

子在川上曰、逝者如斯夫、不舍晝夜。

この章句は、文字の通り人に時を惜しみ學を勉むることを勧められたのである。孔子が嘗て川のほとりに立つて水の流れるのを見つつ、弟子を顧みていはれるには、すべて逝く者はこの川の水の流れるが如く、晝となく夜となく流れ去つて、少しも休むことがないが、光陰も亦これと同じく、一度去つては再び還つて來ない。されば學に志す者は、一寸の光陰をも惜しんで勉強しなければ、後に悔いても及ばない」と訓戒されたのである。

朱子はこの章を以て、道の本體を説いたものであると見てゐるけれども、これは寧ろ光陰を説かれたものであつて水の流を見て

子在川上云云
子罕篇に出づ。

朱子
名は熹、字は晦庵。南宋の大儒。
（西暦一二〇〇年）

朱子
名は熹、字は晦庵。南宋の大儒。
（西暦一二〇〇年）

孔子が人生觀、社會觀を述べられたものと見るが正しいと思ふのである。

子曰、苗而不秀者有矣夫、秀而不實者有矣夫。

これは苗に譬を引いて、學業を成就する者の少いのを歎じ、中途

で挫折することのないやうにしなければならぬと訓へられたのである。秀は華を吐くことで、即ち植物も苗のままでも向に成長せぬものがあり、又成長しても



一 榮 澤 澁

實を結ばぬものがあると仰せられたのであるが、この譬喩は、植物でも、苗が成長して花咲き實を結ぶのと同じく、學に志す人間も、倦まず怠らず勉強して止まなかつたならば、遂に聖賢の域に達し、君

子曰、苗而不
秀者云云
子罕篇に出づ。

相を輔けて仁政を施し民を濟ふに至るべきに、中途にして學を廢する者の多いのは、誠に遺憾千萬であると、且慨歎し、且獎勵せられたのである。

この章句は、直に取つて以て現代に當て嵌めることが出來ると思ふ。何事でも倦まず怠らず勉めて止まなかつたならば、必ず事を成就するに至るものであるが、多くの人は、中途の障礙に挫折してしまふ。こんな決心の鈍いことでは、何事をも成し遂げられるものではない。

子曰、後生可畏、
長云、
子罕篇に出づ。

子曰、後生可畏焉。知來者之不如、今也。四十五而無聞焉。斯亦不足畏也已。

後生とは後進といふことであつて、この章は即ち後進の年少者

は畏るべきものである。後進の士は年も若く、氣力も旺盛であるから、學を積み行を修めて、進んで止まなければ、その將來は測り知られない。されば今後出て來る者が、現在の人に及ばないと定めることは出來ない。然しながら、四十歳五十歳となつても一向に名聲の聞えることのない人であるならば、遂に成業しない凡庸の徒であるから、これ亦畏れるに足らぬと、門弟子を訓戒獎勵せられたのである。

この章句は、孔子が相當の年になつてからいはれたものらしく、初に「後生畏るべし」と推稱され、後に「畏るるに足らず」とこれを抑へられた處に深い教訓が含まれてゐる。とかく老人になると、過去をのみ顧みてその感想を語る弊が多い。卑近な例を擧げると、昔の力士は大きかつたとか、昔の役者は今の役者より上手であつたとか

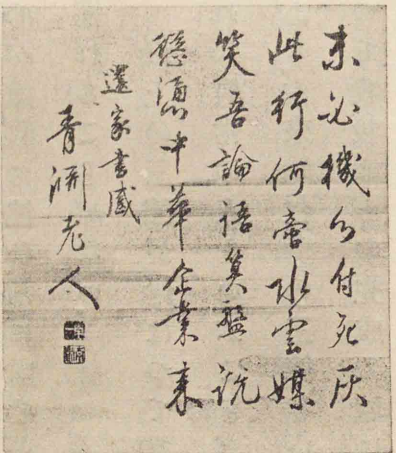
いふことは、よく耳にする所である。これに反して、若い人達は過去が少い故、未來ばかりを説く。その未來あるが爲に、勉めて止まなければ、名を成すに至るのである。世の中の人が過去のみを顧み、後進を輕んじて居つては、時勢の進歩に伴はなくなる。これと共に、後進者がその少壯の時に於いて、勉勵しなかつたならば、後來名を成し世の中を進めることは出來ない。されば青年も老人も、共に相省みて誤に陥らぬやうにありたいと思ふ。

子曰、知者、不惑、仁者、不憂、勇者、不懼。

この章は知仁勇の徳を説かれたものである。智慧があればすべてに對する理窟が分り、よく事の是非善惡を判別することが出来るのであるから、事に處して疑ひ惑ふやうなことがない。これ知者

子曰、知者、不惑云云。
于罕篇に出づ。

の徳である。仁は、論語には、或場合には極めて狹義に解釋し、或場合には隨分廣義に説かれてある。即ち或場合には、人を愛する情とか、他人の難儀を救ふ行爲とかを以て仁としてあるけれども、これを



大にしては能く天下國家を治め、萬民をして不平なく不安なく、各その業に安んぜしめるを以て仁の極致としてある。されば仁者は物質的方面からいへば、必しも悉く幸福といふことは出來ないが、精神的方面か

らこれを見れば、仁者はよく天命を知り、一點の私心が無く、おのれの分を盡し、人としての盡すべき道理を辨へてこれを行つてゐるのであるから、隨つて煩悶が無く、總べての物事に對して憂といふ

未三必機心付ニ
死灰此何
音水雲謀
笑吾論語算
盤說從德中
華一企榮來
還家書感
青淵老人

ものが無いいつでも心の中は光風霽月、洋洋たる春の海のやうな
気分である。これは如何に巨萬の富を積んでも、到底購ふことの出
來るものではなく、偏に仁者にのみ備はる徳である。又勇者はその
心が道義に協ひ、常に虚心平氣であるから、如何なる事に對しても
懼れることがない。

以上の三徳が備はつてゐたならば、人間としては極めて完成さ
れた異常の人といふことが出来る。換言すれば、人としての典型で
ある。古來知仁勇の三徳といふのも、この孔子の教から出たのであ
つて、我我はその完成の域に達することは出来ないまでも、どうか
してこの三徳を備へるやうに努めて止まぬ精神を持たねばなら
ぬのである。(濫澤榮一——處世の大道に據る)

濫澤榮一
子爵。實業家の
巨擘。埼玉縣の
人。天保十一年
生まる。

九 忠度と俊成

薩摩守忠度は何處よりか歸られたりけむ、侍五騎、童一人わが身
ともに、ひた兜七騎取つて返し、五條三位俊成卿の許におはして見
給へば、門戸を閉ぢて開けず。忠度と名告り給へば、落人還り來れり
とてその内騒ぎあへり。薩摩守急ぎ馬より飛んで下り、みづから高
らかに申されけるは、これは三位殿に申すべき事ありて、忠度が參
りて候ふ、假令門をば開けられずとも、この際まで立ち寄り給へ」と
申されたりければ、俊成卿、その人ならば苦しかるまじ。開けて入れ
申せ」とて門を開けて對面ありけり。事の體、何となく物あはれなり。
薩摩守申されけるは、先年申し承はりてより後は、ゆめゆめ疎略
を存せずとは申しながら、この二三箇年は京都の騒、國國の亂出で

忠度
平清盛の弟。壽
永三年二月一の
谷にて戦死す。
(一八〇二年—
一八四三年)
五條三位俊成
歌人。藤原氏。
正三位にして京
の五條に住みし
故にいふ。(一七
七四年—一八六
四年)

來、剩へ當家の身の上に罷り成りて候へば、常に参り寄ること候はず。君既に帝都を出でさせ給ひぬ。一門の運命、今日はや盡きはて候ふ。それに就き候うては、撰集の御沙汰あるべき由承はりて候ひし程に、生涯の面目に、一首なりとも御恩を蒙らむと存じ候ひつるに、かかる世の亂出で來て、その沙汰なく候ふ條、ただ一身の歎と存じ候ふ。この後世靜まつて撰集の御沙汰候はば、これに候ふ卷物の中に、さりぬべき歌候はば、一首なりとも御恩を蒙りて、草の蔭にて嬉しと存じ候はば、遠き御守とこそなり参らせ候はむずれとて、日來詠み置かれたる歌どもの中に、秀歌と覺しきを百餘首書き集められたりける卷物を、今はとて打ち立たれる時取りて持たれるを、鎧の引合より取り出でて、俊成卿に奉らる。

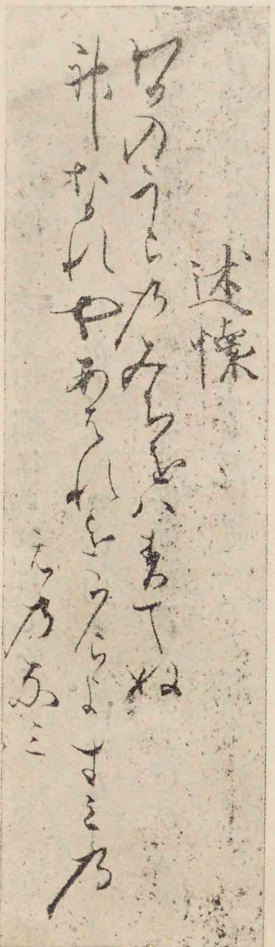
三位これを開きて見給ひて、かかる忘形見どもを賜はり候ふ上

御守とこそ候はむずれ
 めなつかり
 こころあ
 かりせぬ

述懐
 わかのうらの
 みちをばすて
 め神なれやあ
 はれをかけよ
 すみのえのな
 み

さしてぞ一歩
 ませ給ふ
 前途程遠云云
 大江朝綱が渤海
 の使に贈りしもの
 のにて、次句は
 「後會期遙」
 櫻於鴻臚之曉
 涙二。
 千載集
 二十卷。救撰歌
 集なり。文治三
 年九月成る。

は、ゆめゆめ疎略を存ずまじう候ふ。さても唯今の御わたりこそ、情も深う哀も殊に勝れて、感涙抑へ難うこそ候へと宣へば、薩摩守、屍を山野に曝さば曝せ、憂き名を西海の波に流さば流せ。今はうき世に思ひ置くことなし。さらば暇申すとて馬に打ち乗り、兜の緒をしめて、西をさしてぞ歩ませ給ふ。三位、後を遙に見送りて立たれたれば、忠度の聲と覺しくて、前途程遠、馳思於雁山之夕、雲と高らかに口吟み給へば、俊成卿もいとど哀に覺えて、涙を抑へて入り給ひぬ。その後世靜まりて千載集を撰ぜられけるに、忠度のありし有様



筆成俊原藤

一首をぞ一人
れられたる

志賀の都
滋賀縣滋賀郡に
ありし天智天皇
の大津宮。
ながらの山
滋賀縣滋賀郡。

いひ置きし言の葉、今更思ひ出でて哀なりければ、件の卷物の中に、
さりぬべき歌いくらもありけれども、その身救勘の人なれば、名字
をば現はされず、故郷花といふ題にて詠まれたる歌一首をぞ、よみ
人知らずとて入れられたる。
さざなみや志賀の都はあれにしを

むかしながらの山ざくらかな。

その身朝敵となりぬる上は、仔細に及ばずといひながら、恨めしか
りける事どもなり。(平家物語)

祇園精舎の鐘の聲、諸行無常の響あり。沙羅雙樹の花の色、盛者必衰のこ
とわりをあらはす。驕れるもの久しからず、ただ春の夜の夢の如し。たけ
き人も遂には滅びぬ。偏に風の前の塵にのみ。 (平家物語)

一〇 藝苑逸話

一、繪佛師良秀

繪佛師良秀といふ僧ありけり。家の鄰より火出で来ておし覆ひ
ければ、大路に出でにけり。人の描かする佛もおはしけり。又物も打
ちかづかぬ妻子などもさながら在りけり。それをも知らず、身ばか
りただ一人出でたるを事にして、むかひのつらに立てりけり。火は
やわが家に移りて煙燄くゆりけるに、大方さりげなげにて眺めけ
るを、知音どもとぶらひけれども、騒がざりけり。いかにと見れば、家
の焼くるを見て、打ちうなづき、打ちうなづきして、時時笑ひて、あは
れしつる所得かな。年頃わろく描けるものかなといふ時、とぶらひ
來ける者ども、こはいかに、かくてはあさましき事かな。物の憑き給

ナ訓抄
建長四年成る三卷作者
不唯本邦訓抄高矢
全篇十段 良秀にたどり
各段の始末 傳未詳。一訓を
のべたに今和漢のや
例をのせしめたり
可なり
た、今、集
建長三年
成る三卷
十種に分類
へた、小の
説話

知音
説苑に「鍾子期
死、伯牙破琴斷
絃、終身不復
鼓琴、以爲世
無知音者。」

知
心
の
知
心
の
知
心

不動尊
五大明王の中
尊。右手銀を持
ち、左手索繩を
持ち、背に火燄
を負ふ。
我黨こそ惜
しみ給へ

鳥羽僧正
名は覺猷。戲畫
の名手。二七一
三年―一八〇〇
年



正 僧 卷 繪 歌 鳥

へるかといへば、何條物の憑くべきぞ。年頃不動尊の火燄を悪しう描けるなり。はや見取りたり。これこそは所得よ。この道を立てて世にあらむには、佛をだによく描き奉らば百千の家も出て來なむずるものを。我黨こそ、このさせる能もおはせねば物を惜しみ給へといひて、あざ笑ひて立てりけり。その後、良秀がよびり不動とて人人めであへりけり。

(十訓抄)

二、鳥羽僧正

鳥羽僧正は近き世には並なき繪かきなり。法勝寺の金堂の扉の繪かきし人なり。いつ程のことにか、供米の不法の事あ

誰がしたりけ
む
院
鳥羽法皇。



(筆 猷 覺)

その心を僧正に御尋ありければ、あまりに供米不法に候ひて、實の物は入り候はで、糠のみ入りて軽く候ふゆゑに、辻風に吹き揚げられ候ふを、さりとはとて、小法師ばらがり取りとどめむとし候ふがを、かしよう候ふを描きて候ふと申されければ、比興のことなりとて、それより供米の沙汰厳しくなりて、不法のことなかりけり。

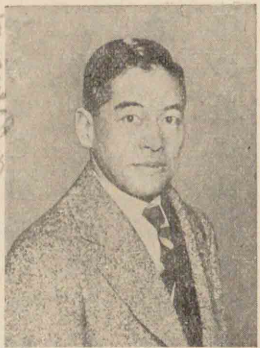
(古今著聞集)

一一 道程を愛する心

風のない静かな日、うらかな日影を一杯にうけながら、私は蒲公英や、蓮華の咲いた川岸に腰をかけて、漣すら立たない青い水の上に、ほつとり浮いてゐる。泛子^{はんこ}を一心に眺めてゐた。折折、びくびくと泛子が動く。いま喰べてゐるな、さう思つて顔のほてるやうな悦を感じた。と、泛子がまただらりと横に寝てしまふ。やめたな、さう思ひながら、でも一分も油断せず、泛子を見詰めてゐる。

その少年の日を、私はある懐かしさをもつて思ひ出す。春の日、魚釣、夢のやうな期待、その一切がまざまざと心に甦つてくる。その陶酔の心持を、私は人生の貴重なる断片として秘藏する。その泛子を眺めてゐた私の心の中には、必しも大きい鮒を釣り上げようとい

ふ功名心だけが躍つてゐたのではない。春の野邊のよい空気を吸つて、身體を健康にしようなどといふ手輕な功利觀念は素より毫末もなかつた。況や釣れた鮒で今宵の食膳を賑はさうなどといふ根性に至つては、鵜の毛程もなかつたのである。ただ少年の私は、泛



鶴見祐輔

子の浮き沈みを見てゐるのが嬉しかつたのである。その無心な忘我の心持を、貴きものとして私は思ひ起すのである。

年を取つて後も、我我は折折、かかる心境

に彷徨ひこむことがある。それは山路など一人歩みゆく折である。目的地に早く著かうといふ囚れた心持ではない。ぼんやりと周囲の自然に魅せられて歩んでゐるのである。それは二つながら共通の心持である。それは目的の達成に執著する心でなくして、目的に

理想

理想の立場に於て、安んずるの爲に、
悔のあり、最良、最善、最良
を考へ。

達する道行を愛する心である。事業の結果よりも、その結果に辿り
つく道程を尙しとする心である。結果を尙ぶ功利観（功利観を考へ）よりも、結果を
作りつつある精神の働を高しとする理想観である。人の世の成敗
の迹よりも、成敗の底に流れて、成敗の外にある精神力を崇むる心
である。この心持の相違が、我々の人生觀の根本を決定する。

結果を重んずる人は、如何にかしてこの世に於いて結果を擧げ
なければならぬ。故に一切の活動と精魂とは、擧げてこの結果獲
得の最終目的に供せられなければならない。如何なる智術を以て
しても、如何なる手段を用ゐても、如何なる犠牲を拂つても、この現
實の結果完成の爲に努力しなければならぬ。それが俗悪非道と
いはれようとも、一切は目的達成の爲に是認せられる。仁義も、道徳
も、人情も、要はかかる目的達成の手段に過ぎない。故に道徳の命令

と、目的達成の成否とが衝突する時は、道徳をば躊躇なく泥溝のう
ちに遺棄してしまふ。道徳も仁義も、自己の目的達成に支障なき範
圍内に於いてのことである。

道程を愛する心は、全然これと異なる。ある彫刻家が彫刻をする
のは、美しい不朽の作品を作らうが爲に彫刻するのではない。その
鑿の一刻み一刻みに不朽の生命ありとして楽しむのである。彫る
ことが自身の楽しみである。かかる美しい塑像を腦裏に描き出し
つつある精神の悦である。かかる彫刻家に取つては、その彫刻の業
半ばにして、天災の爲に天潰え地壞れ、彼の命は絶え、彫刻も亦滅び
ても、彼はその精神力を動かしたことを感謝しつつ死ぬること
が出来るのである。

或佛人が、或日知己の某英國人の事務室を訪れた處、その英人平

生の忙しさに似ず、呆然として殆ど失心の態に見受けられたので、怪しんでその故を問ふと、主人は、

「私が十數年來努力してゐたことが、昨日出來上つてしまつた。」

といふ。佛人は驚いて、

「そんなに苦心した仕事が出来上つたのなら、さぞ愉快でせうに。」
といふと、主人は首を振つて、

「いや、私は永い間苦心經營した目標が急になつたので、今日からまるで何をしていたか解らないのだ。實に世の中が詰らなくなつた。」

といつた。これを聞いた佛人は心の中で、英國の偉大はここにある。」と感歎したといふことである。その英國人は結果を愛せずして、結果に到るまでの道程を愛したのである。それは本當に勞役を愛し、

活動を愛する心である。

最近歐洲に於いて、古代希臘の研究が又旺になつたについて、斯道の大家たる或大學教授が、古代希臘の偉大を説いて、古代希臘が世界文化史上にかかる特有なる地位を占むるは、その完成した文化自身の故ではなくて、この文化を生んだ精神の爲である。その集積した知識の總和の爲ではなくて、知識を愛する情操の故である。その整然たる社會制度の爲ではなくて、その社會の爲に身を賭して惜しまなかつた義勇心の故である」と評したのは、頗る味はふべき言葉である。

地中海文明時代に、水の國希臘の文化があつた。大西洋文明時代に、水の國英國の文化があつた。太平洋文明時代に、水の國日本の文化は果して起るであらうか。否、是非起らなければならぬ。それには

鶴見祐輔
岡山縣の人。法
學士。

先進國たる希臘人又は英國人の持つた偉大な精神を學ぶ必要がある。その精神とはいふまでもなく、道程を愛する極めてゆとりあるまじめな心境である。(鶴見祐輔—中道を歩む心による)

理學博士菊池大麓は英國留學中ケンブリヂ大學に於ける唯一の東洋人で、而も常に首席で通した。これと競争して惜しくも常に一籌を輸してゐたのはブラウンといふ學生だつた。或時菊池が病氣で入院した時、豫てくやしがつてゐた學生達は、この時こそと手を拍ち、彼にノートを貸さぬ事にして、ブラウンに主席を占めさせようとした。ブラウンは毅然として「君達はそれでも英國の學生か、僕は人の虚に乗じてまで勝たうといふ卑しい料簡は斷じて持たない」といつて、菊池を見舞ひ、且ノートを貸してやつた。その結果ブラウンは相變らず第二位に止まらなければならなかつたが、これで僕は英國人の誇を傷つけずに済んだ」といつて莞爾とした。

二二 心の耳

心柄といふものは、ほんの一寸した言葉の端にも露はれるものである。
心の指もめらめら

ある時、三人の男が膝を交へて坐つてゐた。そこへバナナをお盆に山ほど女中が持つて來た。そのバナナはまだ青かつた。これを見た瞬間に、一人が「ああ、いいな」といつた。一人は「だめぢやないか、青いな」といつた。一人は「全く、小笠原のは値ばかり高くてね」といつた。一人は畫家で、一人は商人、あとの一人はその珈琲店の主人だつた。畫家はその時、色のがやきを觀た。商人は味を感じた。そしてその店の主人公は値を考へて、一緒にはつと思つたのである。このうちの誰の心が一番尊く磨かれてゐたか。

小笠原
八丈島の南百八十
里に在り。大
小數十の島嶼よ
り成る。文祿二
年小笠原貞頼の
發見。今は東京
府の所管。

畫家は無論輝いた青い色を觀たばかりではあるまい。その輝の底に潜むバナナの生きた命そのものをも觀徹したに違ない。

昔の武藝者は、霜の降る聲にも目を覺したといふが、それは恐しい位張り詰めた心そのもので感ずるので、單に耳だけで聽いてゐるのではない。身體全部が耳になり、身體全部に滿ち渡つた精神力そのもので感ずるのである。これ位隙がなくなれば占めたものだ。然し、それにしても、始はやはり耳から入つてくるのであるから、とにかく耳から鍛へ抜かないといふと、それほど澄み入る譯にはゆかない。

譬へば、醫者が病人の胸の上を、指先でとんとんと打つ。あれなども、耳だけで音ばかりを聽いてゐる譯ではない。そこは熟練で、音を聽くといふよりも、直覺である。その場合指先が耳になつてゐる。身

體全部が耳になつてゐる。心が耳になつてゐる。

もつと際どい話になると、よく、太刀風三寸にして身をかはずといふ。眞つ暗がりで、うしろからさつと來る、はつと思つた瞬間に、名人ならば、ひよいとかはす。これは耳で識るのではない。身體全部の直覺で、はつと悟るのである。そこまでゆくと、全く身體は鍛へ抜いてある。

それがなかなかの事であつて、生半可の修業者には滅多に出來る話ではない。

藝道の極意に達した程の名人は、流石にみんな違つてゐる。私の郷里に、大さんといふ盲人の琴の師匠がゐる。琴にかけては永年の修業で、今は全く名手と云つていい。その盲人はいつも粗末な荒壁のままの床の上に、圓胴の小さな太鼓をたつた一つ置いて、それを

私の郷里
福岡縣柳河町。

背後に、いつも惚れ惚れと坐つてゐる。太鼓の音に聴き入つてゐるのである。心の耳が澄んで來ると、敲かぬ太鼓の音までも聞えて來るといふのである。

そこまで達した大さんは實にえらい。これは一つには琴の方で、音といふ音を聴くことに修練し抜いたお蔭である。三昧に入つてゐる。(北原白秋—洗心雜話)

北原白秋
詩人。名は隆吉。
明治十八年福岡
縣柳河町に生ま
る。詩歌童謡隨
筆等の著作多
し。

己の文を讀みて、眞に拙陋厭ふべく悲しむべきを感じずるものは幸なり。蓋し自ら省みて眞にその拙陋厭ふべく悲しむべきを感じるは、その人の文を作る手は未だ進まずと雖も、その人の文を見る眼は、既に進みたるなり。眼進まば手も亦漸く進むべし。日に自ら見て足らずとするものは、その文日に漸く進まん。(幸田露伴)

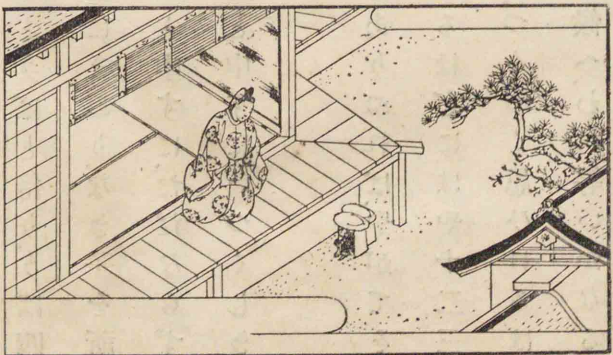
一三 一寸法師

難波の里
今の大阪市。
住吉
大阪市住吉區住
吉神社。

中頃の事なるに、津の國難波の里に、おうちとうばと侍り。うば四十におよぶまで、子のなきことを悲しみ住吉にまゐり、なき子を祈り申すに、大明神あはれと思し召して、四十一と申すに、ただならずなりぬれば、おうち喜かぎりなし。やがて十月と申すに、いつくしき男子をまうけけり。

さりながら生まれ落ちてより後、せい一寸ありぬれば、やがてその名を一寸法師と名づけられたり。年月を経るほどに、はや十二三になるまで育てぬれども、せいも人並ならず。つくづく思ひけるは、ただ者にてはあらず、ただ化物風情にてこそ候へ、われ等いかなる罪の報にて、かやうの者をば住吉よりたまはりたるぞや、淺ましき

ことと見るめも不便なり。夫婦人にいひけるやうは、あの一寸法師
 めをいづ方へもやらばやと思ひける」と申
 せば、やがて一寸法師、その由承はり、親にも
 かやうに思はるるも、口惜しき次第かない
 づ方へも行かばやと思ひ、刀なくてはいか
 がと思ひ、針を一つうばに乞ひければ、取り
 出したびにけり。すなはち、麥稈にて柄鞘を
 こしらへ、都へ上らばやと思ひしが、自然舟
 なくてはいかががあるべきとて、又うばに「御
 器と箸とをたべ」と申しうけ、名残をしとと
 どむれども、立ち出でにけり。住吉の浦より御器を舟として、うち乗
 りて、都へぞ上りける。



い
か
が
あ
る
べ
き

鳥羽
京都府紀伊郡。
淀の川舟の發著
所。

すみなれし難波の浦をたち出でて

都へいそぐわがころかな

かくて鳥羽の津に舟を乗り捨てて都に上りここやかしこと見
 る程に、四條五條の有様、心も言葉にも及ばれず。さて三條の宰相殿
 と申す人の許に立ち寄りて、「物申さん」といひければ、宰相殿はきこ
 しめし、面白き聲と聞き、縁のはなへ立ち出でて御覽ずれども人も
 なし。一寸法師、かくて人にも踏み殺されんと、ありつる足駄の下に
 て、「物申さん」と申せば、宰相殿不思議のことかな人は見えずして、面
 白き聲にてよばはる、出でて見ばやと思し召し、そこなる足駄はか
 んと召されければ、足駄の下より、「人な踏ませ給ひそ」と申す。不思議
 に思ひて見れば、逸興なるものにてありけり。宰相殿御覽じて、げに
 も面白き者なりとて、御笑ひなされけり。（お伽草紙）

人
な
踏
ま
せ
給
ひ
そ

齋藤茂吉

醫學博士。明治十四年七月山形縣に生まる。アララギ同人。

若山牧水

歌人。名は繁。宮崎縣の人。雜誌「創作」主宰。昭和三年九月歿す。(二五四五年—二五八八年)

前田夕暮

歌人。名は洋造。明治十八年七月神奈川縣に生まる。

島木赤彦

歌人。本名は久保田俊彦。長野縣の人。アララギ同人。大正十五年三月歿す。(二五三六年—二五八六年)

一四 曼珠沙華

斎藤茂吉

ふしとよみたりしうけあきさうごう
曼珠沙華咲き秋はさびしく

若山牧水

いそはらうらやうゆのなをさびしく
さうせいむ國はけふも枯ゆく

前田夕暮

のづみのこははらひもよふらさう
まろしきまろしきちりさうさう

島木赤彦

あやうみうらうごれそは冬回り

あやう湖なう鴨あゆみくり

石川啄木

いのらぬいそたあひのし志

さよよいそへ地

指れをゆびれ百

よりたつ

寝つ讀む本の重さに

つかれた

手を休めは物を思へり

啄木

石川啄木筆

東海の小島の磯の白砂に

われなまぬきつらにもたふさう

尾上柴舟

つけまろしびの煙のあかりと

ふらゆく頭枕山いづれ

石川啄木

文士。名は一。岩手縣の人。独自の歌風を拓く。明治四十五年歿す。(二五四六年—二五七二年)

尾上柴舟

文學博士。名は八郎。明治八年八月岡山縣に生まる。東京女子高等師範學校教授。

與謝野寬

歌人。京都の人。明治六年二月生まる。雑誌「明星」を主宰す。慶應義塾大學講師。

金子元臣

國文學者。歌人。明治元年十二月東京に生まる。御歌所寄人。國學院大學教授。

佐佐木信綱

文學博士。歌人。三重縣の人。明治五年六月生まる。東京帝國大學講師。

富士にのぼりて

いつよりか天のうきはし中たえて人と神との遠ざかりけむ 信綱

与謝野寬
 二葉山に火のあふれもらぐらの
 赤いの舟にひまをれぬ
 金子元臣
 いざの笛吹けもならば揚巻れ
 せいりのわかれや馬しー
 佐々木信綱
 ゆく秋のやよみくにのやうどの
 塔のつとめももひらねども
 富士にのぼりて
 いつよりか天のうきはし中たえて人と神との遠ざかりけむ 信綱

筆綱信木佐佐

落合直文

國文學者。萩の家主人と號す。仙臺の人。明治の國文學復興及び和歌革新に大功あり。明治三十六年十二月歿す。(二五二一年—二五六三年)

小出繁

歌人。石見の人。八田知紀の門。御歌所寄人。明治四十一年四月歿す。(二五六八年)

高崎正風

男爵。樞密顧問官。宮内省御歌所長。鹿兒島の人。八田知紀の門人。明治四十五年二月歿す。(二四九六年—二五七二年)

落合直文
 一はしてさよふまゝいそむこころ
 おやまゝいそむこころあはれ
 小出 繁
 うららかに春風に
 わが人のまかたもあはれ
 高崎正風
 木懐
 うららかに春風に
 わが人のまかたもあはれ

筆風正崎高

述懐
いかにしてす
きかへさまし
うるしこすか
みよりうすき
人のこゝろを
正風

西那須野
栃木縣那須郡。

一五 鹽原

車は馳せ景は移り、境は轉じ客は變れど、我は安からざる悵鬱を
抱きて、遣る方なき五時間のひとりに倦み疲れつつ、はじめて西那
須野の驛に下車せり。

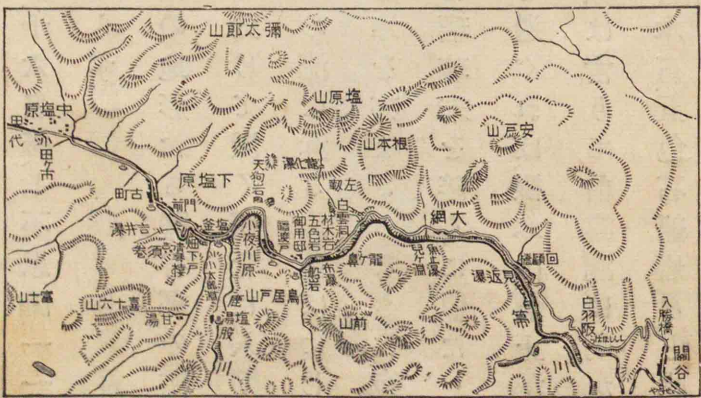
直に西北に向ひて、今なほ茫茫たる古への那須野が原に入れば、
天は闊く地は遐に、ただ平蕪迷ひ斷雲飛ぶのみにして、三里の坦途
一帯の重巒、鹽原はそこぞと見えて行く程に、路は窮まらず、漸く千
本松を過ぎ、進みて關谷村に至れば、人家の盡くる處に淙淙の響あ
りて、これに架れるを入勝橋となす。

橋を渡りて僅に行けば、日光暗く山厚く疊み、嵐氣冷かに、壑深く
陥りて、いくめぐりせる九折の、後には密樹聲聲の鳥啼き、前には幽

この緒よりや
拾遺集、齋宮女
御一琴の音に峯
の松風かよふら
しいづれの緒よ
りしらべそめけ
む。

草歩歩の花をひらき、愈登れば、遙に木がくれの音のみ聞えし流の
水上は淺く見はれて、すはや、ここに空山
の雷、白光を放ちて崩れ落ちたるか、とす
さまじかり、道の右は山を割りて長壁と
なし、谷幽に蘚碧にして、幾條ともなく白
絲を亂し懸けたる細瀧小瀧の珊瑚とし
て灑げるは、嶺上の松の調も定めてこの
緒よりやと見捨て難し。

白羽阪を踰えてより、回顧橋に三十尺
の飛瀑を踏みて、山中の景ははじめて奇
なり。これより行きて、道あれば水あり、水
あれば必ず橋あり、全嶺にして三十橋。山あれば巖あり、巖あれば必



ず瀑あり、全嶺にして七十瀑、地あれば泉あり、泉あれば必ず熱あり、
全村にして四十五湯、なほ數ふれば十二勝、十六名所、七不思議、一一

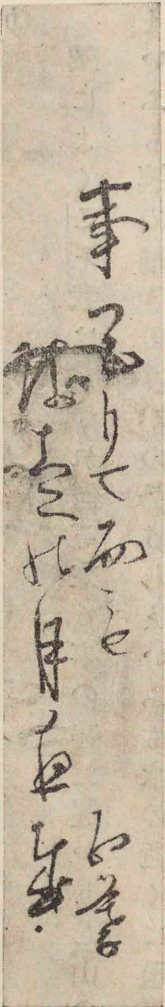
探り得べくもあらず。

そもそも鹽原の地形たる、鹽谷郡の南
より群峯の間を分けて深く西北に入り、
縣縣として箒川の流に浜る片そばにし
て、到る處巉巖の水を夾まざるなきは、宛
然青銅の藥研に瑠璃末を碎くに似たり。
まづ大綱の湯を過ぐれば、根本山、魚止瀑、
兒が淵、左靱の嶮は古りて白雲洞は朗か
に、布瀑龍が鼻材木石、五色石、船岩など眺



め行けば、鳥居戸前山の翠衣に染みて、福渡戸の里に入るなり。それ

より前面に幾百仞の巨巖嶙峋たる天狗岩の奇勝を仰ぎ、小夜の河
原の激湍に怪石の磊砢たるを俯瞰し、途すがら崖のところどころ
に咲き残りたる躑躅、山藤などうち眺めつつ行くほどに、鹽釜の湯、
甘湯澤、小太郎が淵など早くも過ぎて、いつか畑下戸の里に著きぬ。



筆葉紅崎尾

一村十二戸、温泉は五箇所に涌きて五軒の宿あり。ここに清琴樓
と呼べるは、南に方りて箒川の緩くめぐれる磧に臨めり。俯すれば
水石の粼粼たるを見、仰げば西は富士、喜十六の翠巒と對して清風
座に滿ち、袖の澤を落ちくる流は二十丈の絶壁に懸りて、素練を垂
れたる如き吉井瀑となり、東北は山又山を重ねて琅玕の玉簾深く、

事足りて而も
師走の月夜哉
紅葉

一望の下、丘壑の富を擅にし、林泉のおごりを窮めらるるなど、又あるまじき別境なり。

我はこの繪を見る如き清穩の風景にあひて、かの途上嶮しき巖と激しき流との爲に、幾度か魂飛び肉消して、理むる方なくかき亂されし胸のうちは、藹然として頓に和ぎ、恍然としてすべて忘れたり。

何ぞ遅かりし
おのれこそ
愚の者なれや

誠によくこそ我は來つれ、何ぞ來る事の甚だ遅かりし。山の麗しいふも壤の堆きのみ。川の暢けしといふも水の逝くに過ぎざるのみ。牢として抜くべからざるわが半生の痼疾は、いかでか壤と水との醫すべきものならんと、齒牙にも懸けず侮りたりしおのれこそ、まづ侮らるべき愚の者なれや。

見よ見よ。木木の緑も、浮べる雲も、秀づる嶺も、流るる溪も、そばだ

つ巖も、吹きくる風も、日の光も、鶏の啼く音も、空の色も、皆おのづから浮世のものならで、我はここに憂を忘れ、悲しみを忘れ、苦しみを忘れ、勞を忘れて、身はかの雲と軽く、心はこの水と淡し。希はくは、今よりかくの如くにしてわが生を終へんかな。(尾崎紅葉)

尾崎紅葉
小説家。名は徳太郎。また十千萬堂と號す。幸田露伴と並びて明治文壇の雙壁と稱せらる。明治三十六年十月歿す。(二五二七年—二五六三年)

紅葉山人が讀賣新聞に小説を書いた當時、時折休掲するのを、社長は怠惰からとのみ考へて、私の主筆時代にも幾度も小言が出た。私も後には困つて、山人の原稿を示し、讀めば珠の如き流麗の文も、實はこの通り貼り紙が多いのである。御覽なさい、一箇所に何枚も貼つてあるではないかと、一枚一枚剝がして、直しの経過を示すと、社長も始めて一語一句かりそめならぬことを首肯した。山人は或時尺八のことを書くに、自らその心得が無いため、はたと困つて、向島の友人の宅に泊りがけで研究に行つたこともある。その時も二日ばかり休掲したが、私は山人の手紙を示して、名人の心掛はかやうなものであると分疏したこともあつた。(市島謙吉)

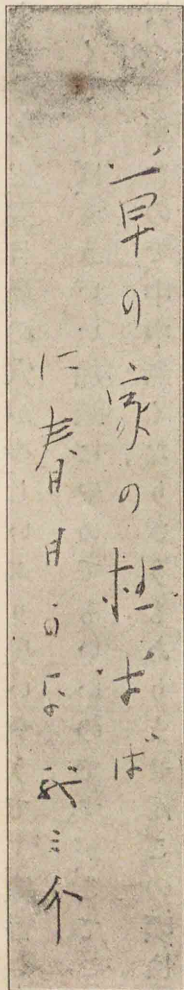
一六 夏目先生におくる

先生。また手紙を書きます。嗚この頃の暑さに、我我の長い手紙をお読みになるのは御迷惑だらうと思ひますが、これも我我のやうな門下生を持つた因果とおあきらめ下さい。そのかはり御返事の御心配には及びません。先生へ手紙を書くといふそのことが、我我の満足なのですから。

今日は我我のボヘミアン、ライフを少し御紹介致します。今居る處は、この家で別荘と稱する十疊と六疊と二間つづきのかげ離れた一棟ですが、女中始め我我以外の間人は、飯の時と、夜寢床をとる時との外はやつて來ません。これが先づ我我の生活自由ならしめる第一の條件です。我我はこの別荘の天地

ボヘミアン、
ライフ
Bohemian
life
放縱生活。

草の家の柱半
ばに春日かな
龍之介



筆之龍川芥

に。寢巻も起き巻も一つで、ごろごろしてゐます。來る時に二人とも時計を忘れたので、何時に起きて何時に寝るのだから、我我にはさつぱり分りません。何しろ太陽の高さで略見當をつけるのですから、非常に「帳中日月長」といふ氣がします。蒲團やかい巻は可なり清潔ですが、蚊帳は穴があるやうです。やうですといふのは、何時でも蚊が入つてゐるからで、實際穴

があるかどうか面倒臭いから調べて見たことはありません。獅噛火鉢を一つ蚊帳の中に入れて、その中で盛に蚊遣線香をいぶします。久米の説に據ると、いぶし過ぎた晩は、明るる日頭

が痛いさうです。ではよさうかと聞きますと、蚊に食はれるよりは頭痛のする方がまだいいといひます。そこで、やはり毎晩十本位づつ燃すことにきめました。頭痛はしないまでも、いぶし過ぎると、翌日鼻の穴が少しいぶり臭いやうです。線香さへ無くなれば、もういい加減にやめてもいいのですが、こてこて買つて來たので、中中無くなりさうもありません。この頃はそれが少し苦になり出しました。

海へは雨さへ降つてゐなければ、何事を措いても這入ります。ここは波の靜かな時でも、外よりは餘程大きなのが來ますから、少し風が吹くと、文字通りに波瀾洶湧します。一昨日我我が這入つてゐた時でした。私が少し泳いで、それから背の立つ處へ來て見ると、どうしたのだから、居る筈の久米の姿が見えませ

ん。多分先に上つたのだらうと思つて、砂濱の方へ來て見ますと、果してそこに寝轉んでゐました。が、いやな顔色をして兩手で面を抑へながら、うんうんいつてゐるのです。心臓の悪い男です。から、どうしたのかと思つて、心配しながら聞いて見ますと、實は無理に遠くまで泳いでいつた爲に、歸りに何度も波をかぶつて、大變苦しんだのださうです。なぜ又そんなに遠くへ行つたのだと聞きますと、男の癖にあそこまで位泳げなくてはと思つて奮發したのだといふ事でした。詰らない見えをしたものです。

我我は海岸で運動をして、盛に飯を食つてゐるのですから、健康の心配は入りませんが、先生は東京で暑いのに小説を書いてお出でになるのですから、さうは往きません。どうかお體を

修善寺
靜岡縣田方郡に
ある温泉。

芥川龍之介
文學者。東京の
人。昭和二年七
月歿す。(二五五
三年―二五八七
年)

御大事になすつて下さい。修善寺の御病氣以來、實際我我は先生が寢てお出でになるといふと、ひやひやします。先生は少くとも我我青年の爲に、何時も御丈夫でなければいけません。これです。

(芥川龍之介―芥川龍之介全集)

漱石氏が大學で講義をして居た時分、いつも左手を懷手して、氏の講義を聽いて居る學生があつた。氏は講義をしながら、じろり、じろりその學生を睨みつけて居たが、學生は一向感じないと見えて、相變らず懷手をしてゐる。氏はたまりかねたか、つかつかとその前に進み、懷手をよし給へ」といつた。學生はさつと顔を赤らめて、そのまゝ机に俯伏してしまつた。講義を了へて教室を出ようとする時、その學生は氏の側に近寄り、「實は私は左の手がないのです」と囁いた。これには氏も面喰つて、暫く學生の顔を見つめて居たが、やがていふには、「いやそれは氣の毒なことだ。しかし僕も無い智慧を絞つて講義をしてゐるのだから、君もない手を出して聽いたらどうかね。」(文藝夏目漱石)

一七 そぞろ言

一、雪の朝

いひたりしこ
そ―をかし
りしか

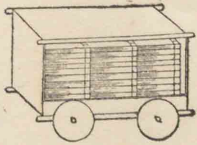
雪のおもしろう降りたりしあした、人のがりいふべき事ありて、文を遣るとて、雪のこと何ともいはざりし返事に、「この雪いかが見る」と、一筆宣はせぬ程のひがひがしからむ人の仰せらるること、聞き入るべきかは、返す返す口惜しき御心なり」といひたりしこそをかしかりしか。今はなき人なれば、かばかりの事も忘れ難し。

(徒然草)

二、青き眼

さしたる事なくて、人のがり往くはよからぬ事なり、用ありて往きたりとも、その事果てなば疾く歸るべし。久しく居たる、いとむづ

阮籍が青き眼
晉書に、阮籍が
事をいひて、「不
拘禮教、能爲三
白眼、對人」。



文車

かし。人と對ひたれば詞も多く身もくたびれ、心も靜かならず、よろ
づの事障りて時を移す。互のため益なし。厭はしげにいはむもわろ
し。心づきなき事あらむ折は、なかなかその由をいひてむ。同じ心
に對はまほしく思はむ人のつれづれにて、今しばし、今日は心靜か
になどいはむはこの限にはあらざるべし。阮籍が青き眼誰もある
べき事なり。その事となきに、人の來りて、のどかに物語して歸りぬ
るいとよし。又文も、久しく聞えさせねば、などばかりいひおこせた
る、いと嬉し。(徒然草)

三、賤しげなるもの

賤しげなるもの。居たるあたりに調度の多き、硯に筆の多き、持佛
堂に佛の多き、前栽に石草木の多き、家の内に子孫の多き、人にあひ
て詞の多き、願文に作善多く書き載せたる、多くて見苦しからぬは

文車の文、塵塚の塵。(徒然草)

四、見ぬ世の友

ひとり燈火の下に文をひろげて、見
ぬ世の人を友とするこそ、こよなう慰
むわざなれ。文は文選のあはれなる卷
卷、白氏文集、老子のことば、南華の篇、こ
の國の博士どもの書けるものも、いに
しへのはあはれなること多かり。

(徒然草)

五、二つの矢

ある人、弓射ることを習ふに、諸矢を
たばさみて的に向ふ。師のいはく、「初心



(筆榮松) 賢七の竹林

文選
六十卷。梁の昭
明太子の編。周
以來の詩文集な
り。
白氏文集
七十五卷。唐の
白居易の詩文集
なり。
老子のことば
老子二卷。周の
李耳の著。その
大道上徳を説く
こと五千言。
南華の篇
莊子のこと。八
卷。周の莊周の
著。唐の代、莊
子を尊びて、南
華真人と稱せし
より、一に南華
真經といへり。

何ぞ一甚だ難
き

の人、二つの矢を持つこと勿れ。後の矢を頼みて、はじめの矢になほざりの心あり。毎度ただ得失なく、この一矢に定むべしと思へ」といふ。僅に二つの矢師の前にて一つをおろかにせむと思はむや。懈怠の心みづから知らずと雖も、師これを知る。このいましめ萬事に互るべし。道を學する人、夕べには朝あらむことを思ひ、朝には夕べあらむことを思ひて、重ねてねむごろに修せむことを期す。況や一刹那のうちにて於いて懈怠の心あることを知らむや。何ぞ只今の一念において直にすることの甚だ難き。(徒然草)

契りよく花とならびの岡のべにあはれ幾代の春をすぐさむ(兼好)
世の中をわたりくらべて今ぞ知る阿波の鳴門は波風もなし(同)
住めば又うき世なりけりよそながら思ひしままの山里もがな(同)

物のあはれ

一八 小園の記

我に二十坪の小園あり。園は家の南にありて、上野の杉を垣の外に控へたり。場末の家まばらに建てられたれば、青空の庭の外に擴がりて、雲行き、鳥翔る様もいとゆたかに眺めらる。初めてここに移りし頃は、僅に竹藪を開きたる迹とおぼしく、草も木も無き裸の庭なりしを、やがて家主なる人の小松三本を栽ゑて、稍物めかしたるに、鄰の老媪の與へたる薔薇の苗さへ植ゑ添へて、四五輪の花に吟興を鼓せらるること多かりき。

一年軍に従ひて金州に渡りしが、その歸途病を得て、須磨に、故郷に、思はぬ日を費し、半年を経て家に歸り著きし時は、秋將に暮れんとする頃なり。庭の面去年より遙にさびまさりて、白菊の一もと二

將に暮れん

三徑就荒陶淵明の歸去來辭に、「三徑就荒、松菊猶存。」

もとねづくれて咲き亂れたる、この景に對して靜かに昨日を思へば萬感そぞろに胸に塞り、辛き命助かりて歸りし身の衰は、ただこの嬉しさに勝たれて、思はず「三徑就荒」と口ずさむも涙がちなり。ありふれたるこの花、狹苦しきこの庭の、かくまで人を感じしめんと



正岡子規

は、曾て思ひ寄らざりき。ましてこれより後、病いよいよ募りて足立たず、門を出づる能はざるに至れる今、小園は余が天地にして、草花は余が唯一の詩料となりぬ。余をして幾何か獄窓に呻吟するにまさると思はしむるものは、この十歩の地と數種の芳葩とのあるが爲に外ならず。

次の年、春漸く催して、鳥の聲いとうららかに聞えしある日、病の窓を開きて端近くにじり出で、讀書に勞れたる目を遊ばすに、いき

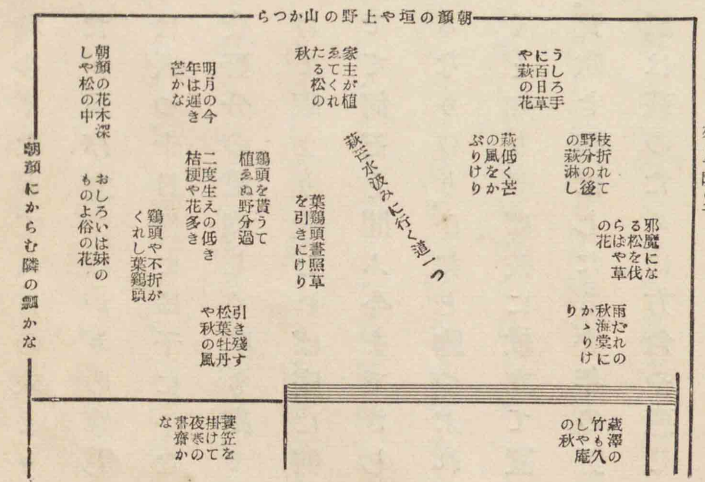
いきとしたる草木の生氣は、手のひら程の中にも動きて、まだ薄寒き風のひやひやと病衣の隙を侵すも、いと心地よく覺ゆ。これも隣の姫より貰へりといふ萩の刈株、寸ばかりの緑をふいて、逞ましき秋の色も思はる。眞晝過より、夕影椎の樹に落つるまで、何を見るとなく、酔うたるが如く、勞れたるが如く、うつとりとして日を暮すことさへ多かり。

今まで病と寒氣とに惱まされて、弱り盡したる余は、この時新に生命を與へられたる赤子の如く、これより萩の芽と共に健全に育つべしと思へり。折ふし黄なる蝶の飛び來たりて垣根に花をあさるを見ては、そぞろに我が魂のおのづから動き出でて、ともに花を尋ね、香を探り、物の芽にとまりて、しばし羽を休むるかと思へば、低き杉垣を越えて、隣の庭をうちめぐり、再び舞ひ戻りて松の梢にひ



らひら、水鉢の上にひらひら、一吹の風に、高く吹かれながら向の屋
 根に隠れたる時、我にもあらず惘然として自失す。忽ち心づけば、身
 に熱氣を感じて、心地なやましく、内に入り障子たつると共に、蒲團
 引き被れば、夢にもあらず、幻にもあらず、身は廣く限無き原野の中
 にありて、今飛び去りし蝶と共に狂ひまはる。狂ふにつけて、何處と
 もなく、數百の蝶の群れ來たりて遊ぶを、つらつら見れば、蝶と見し
 は皆小さき神の子なり。空に響く樂の音につれて、彼等は躍りつつ
 舞ひ上り飛び行くに、我もおくれじと、茨葎のきらひなく踏みしだ
 き、躍り越え、思はず野川に落ちしよと見て、夢覺むれば、寢汗したた
 かに襦袢を濕して、熱は三十九度にや上りけん。
 げんげの花盛過ぎて時鳥の空におとづるる頃は、赤き薔薇、白き
 薔薇咲き満ちて、かんばしき色は見るべき趣なきにはあらねど、我

が小園の見所は、まこと萩、芒のさかりにぞあるべき。今年は去年に



比ぶるに、萩の勢強く、夏のはじめ
 の枝振さへいたく茂りて、末頼も
 しく見えぬ。葉の色も去年の稍黄
 ばみたるには似ず、緑いと濃し。空
 晴れたる日は、椅子をそのほとり
 に据ゑさせ、人に扶けられ、やうや
 くその椅子にたどりつき、氣晴し
 がてら萩の芽に附きたる小さき
 蟲を取りしことも、一度二度には
 あらず。
 桔梗、撫子は實となり、朝顔は花

程こそあれ

の稍少くなりて、八月の末より待ちし萩は、一つ二つ綻び初めたり。飛び立つばかりの嬉しさに、指を折りて、あすは四つ、あさつては八つ、十日目には千にやならんと思ひまうけし程こそあれ、ある夜野分の風烈しく吹き出でぬ。安からぬ夢を結びて、あくる朝、日たけて眠より覺むれば、庭に何やらたゞしのしる聲す。心もとなく這ひ出でて、何ぞと問ふ。今までさしも茂りたる萩の枝、大方折れしをれたるなりけり。びたと胸つぶれて、いかにせましと思へど、せんなくかくと知りせば、枝に杖立て置かましをなど悔ゆるもおろかなりや。瓦吹き飛ばしたる去年の野分にだに、かうはならざりしを、今年の風は萩のために方角や悪しかりけん。この日は晴れわたりやや秋氣を覺え初めしが、余は例の椅子を庭に据ゑさせ、バケツと金盥とに水を湛へて、折れ残りたる萩の泥を洗ひたりしかど、空しく足

の痛みを増したるばかりにて、泥つきたる枝のさきは、蕾腐りて終に花咲くことなかりき。園中何事もなきは、ただ松と芒とのみ。

鷗外漁史
 森林太郎。醫學
 博士。文學博士。
 大正十一年七月
 歿す。(二五二
 三年—二五八四
 年)

晝照草



去年の春彼岸やや過ぎし頃と覺ゆ。鷗外漁史より草花の種幾袋贈られしを、直ぐに播きつけしが、百日草の外は何も生えずしてやみぬ。中にも葉鶏頭のほしかりしを、いと口をしく思ひしが、何とかしけん今年夏の頃、怪しき芽をあらはししものあり。去年葉鶏頭の種を埋めしあたりなれば、必定それなめりと、竹を立てて大事に育てしに、果して二葉より赤き色を見せぬ。嬉しくてあたりの晝照草など引きのけ、やうやう尺餘になりし頃、野分荒れしかば、こればかり氣遣ひしに、思の外に萩は折れて、葉鶏頭は少し傾きしばかりなり。扶け起して竹杖に縛りなどせしかば、恙なくて今は二尺ばかりになりぬ。瘦せてよろよろとしながら、なほ燃ゆるが如き紅しだれ

不折子
中村不折。西洋
畫家。帝國美術
院會員。

正岡子規
名は常規。瀨祭
書屋主人。竹の
里人等の別號あり。俳人。明治
三十五年九月歿
す。(二五二七年
—二五六二年)

て、いとうつくし。二三日ありて、向の家より貰ひ來れりとして、肥え太
りたる鶏頭四本ばかり植ゑ添へたり。その次の日なりけん、朝まだ
きに裏戸を叩く聲あり。戸を開けば、不折子が大きな葉鶏頭一本
引き提げて來りしなりけり。朝霧に濡れつつ手づから植ゑて去り
ぬ。鶏頭、葉鶏頭かがやくばかり華やかなる秋に、壓されて、萩ははや
散りがちなるもあはれ深し。薔薇萩、芒、桔梗などを惠まれて、余が小
樂地の創造に力ありし鄰の老嫗は、その後移りて他に在りしが、今
年秋風に先立ちてみまかりぬとぞ聞えし。

ごてごてと草花植ゑし小庭かな (正岡子規—子規遺稿)

萩ちりてさびしき日なり瀨祭忌 (露石)

絲瓜忌やとところどころの秋の風 (青青)

一九 事實と學說



丘 淺次 郎

世間には、事實と學說とを混同して無駄な議論をしたり、無益な
ことを行ふたりして居る場合が頗る多い。或は學說によつて事實
を否定しようとしたり、或は學說を基礎と
して實行の方法を案出したりなどするが、
かやうなことではその目的の達し得られ
ぬことは前から知れてゐる。かく事實と學
說との價値の相違を認めぬ人の多いのは、初等教育に於いて、事實
と學說との相違を明かに知らしめぬ結果であらう。今日の初等教
育では、生徒は聞かせられ見せられたことをただ信ぜしめられる
だけで、すこしも疑うてかかる心の働を練習する機會が與へられ

ぬから、事實でも學說でも、これを十分に吟味してから受け入れるといふ用意がなく、無差別にこれを信ずる癖がついてゐるのであらう。

事實は、その性質上唯一つよりなくて、間違うてゐないものにきまつてゐるが、人間がこれを知る力には様様の程度があるから、知り易い事實もあれば、知り難い事實もある。ゴム球が圓いといふ事實は、誰でも直接に目で見て知ることが出来るが、地球が圓いといふ事實はなかなか容易には知り難い。自分の住んで居る場所の近邊より外を知らぬ野蠻人は、地面は何處まで往つても平坦なものであると信じてゐて、地球が圓い球であるといふやうなことは、夢にも考へて居ない。然るに、人間の知識が進み、地球や天體に關する多くの事實を知るやうになると、それから綜合して地球が圓いと

いふ事實を知るやうになる。水中に、眼に見えぬ小さな蟲が居るといふことは、昔から事實であつたに相違ないが、顯微鏡が發明せられるまでは、誰もその事實を知ることには出来なかつた。

事實を知るに要する器械や方法が面倒になればなるだけ、結果に誤が生じ易い。物指で机の長さを測る位のことなら、何人でやつても同一の結果が得られるが、一里程の道の長さを測量鎖を以て測る時には、三人で行へば三つの異なつた結果が出る。同じ反物でも、呉服屋の番頭が測つたのと、買手の女が測つたのでは、長さが大分違ふ。更に複雑な器械を用ひ、幾度か勘定を重ねるやうな場合には、誤差もそれだけ多くなつて來る譯である。特に光は一秒に何萬里走るとか、木星の直徑は何千里あるとかいふことになると、實際その測定に従事した人、又はそれに似た仕事をした經驗のある

人などを除いては、日頃見聞してゐることと、餘り縁が遠くて、何だか夢でも見てゐるやうに感ずる。されば事實といふ中にも、それに關する人間の知識の確かさに種種の程度のあることを忘れてはならぬ。

一滴の血液の中には二億五千萬の赤血球があると聞いたたら、それは一體どうして勘定したのかといふ疑が直に起るべき筈である。かかる場合には必ずまづ、如何にしてその數を知り得たかを尋ね、その方法を聞いて、なる程と合點が出来て、初めて事實として承認し、同時にかやうな面倒な方法で知り得たことであるから、或程度の誤差は當然免れぬことと、割引して信ぜねばならぬ。所謂事實に對しても、これだけの注意は常に必要である。

次に學說に對しては多大の注意を要するは勿論で、一一秤にか

けた上でなければ、取り上げることは出来ぬ。學說が當つて居るか否ないかを見分ける標準は、如何に多くの事實と矛盾するかを吟味することである。學說は必ず何等かの基礎となる事實があるもの故、その事實だけを考へると、その學說には何等差支がないやうに感ずるが、他の多くの事實に照し合はせると、始めてその學說に缺點のあることに氣が附く。

學說の評判の高いのは新しい間である。新しい間はまだ評價が濟んでゐないから、どれ程まで眞實に當つてゐるか、頗る怪しい。多くの事實に照し合はせて、どの位まで差支がないかが知れ、誤つた學說なら捨てられ、誤らぬ學說なら残されるのは、遂に後の事であつて、その頃になれば、誤らぬ學說でも一向喧しい評判は立たぬ。それ故まだ評判の高い間は學說は未熟のものとして、そのつもりで

取り扱はねばならぬ。學説を直に事實と見なして、事實と同一の價値をつけるのは大きな買被りである。

學説の當否を見分けるには、事實に照し合はせて吟味して見る外はないが、この點に氣のつくのは常識の働である。常識とは經驗に基づいた實際的の判斷力をいふのである。事實と學説とを混同せぬことも、種種の學説の價値を比較し判斷することも、常識の働である。普通教育で常識の發達するやうに努めたならば、事實と學説とを混同せぬ習慣は自然に生ずるに違ない。尤も學問上の深遠な學説を批判することは、常識のみでは出來ぬ。それにはこれを理解するだけの知識を要する。即ち知識と常識とを合はせ備へてゐなければ、到底立派な判斷は出來ぬのである。

(丘淺次郎 猿の群から共和國まで)

丘淺次郎
理學博士。静岡縣の人。東京高等師範學校名譽教授。

二〇 學者の苦心

上田
文學博士上田萬年。
松井
文學博士松井簡治。



松井簡治

十年一昔といふことを思ふと、上田、松井の二君が國語辭書の編纂に著手せられてからも、一昔はとくに濟んだ。編纂開始の心祝といふので、知友數名が晚餐會に招かれてうち興じたのは、ついこの間のやうな氣もするが、その頃始めて小学校に入つた余が娘は、已に人に嫁いで人の子の母となつて居る。短いやうで長いものである。今やその第一巻がいよいよ出版になるといふ音づれを聞いて、余は初孫の誕生を見た時と同じやうな、而もそれよりは大きい一種の喜悅を禁じ得ないのである。

年の流は水の流とおなじく、世事の變遷は行く雲のやうにきはまりがない。この一昔の間には、日露戰役といふ大事件が起つて、我が日本の國勢を一變せしめた。政治や軍事や工業や貿易やの進歩發展の迹を見ても、その間の十年は通常の十年ではなかつた。二君の編纂事業は、かういふ中に徐徐とその工程を進めて行つたのである。

鑛山から掘り出されて、選り分けられ、鑄分けられて行く鑛石のやうに、幾萬幾十萬となく、古語や新語が、幾百部幾千部の典籍圖書の中から摘出せられ、拾集せられて、書き留められ、整理せられる。編輯室に山を成したカードは、次第に墨やインキで染められて行く。一月、二月、三月、四月、秋も暮れ、春も逝いて、曆も幾たびか改まる。同じ仕事ははてしなくいつまでも續く。傍から見れば、抄の行かぬこと

は齒痒いやうで、何時形のつくことかと危まれる程であつた。編纂室は松井君の邸内の離れ家にあつたが、それでも夜半の半鐘に肝を冷して、餘所ながら無事を祈つたことも幾たびか分らぬ。

二君の筆と頭腦とは間斷なくこの間に活動して、採るものは採り、棄てるものは棄て、その進歩は遅いが、その成果は確實であつた。かくて粒粒積み上げた砂子も遂には山を成す喩のやうに、編纂のやや緒に就いたまでには、鐵道は何千哩落成の祝賀會を催したし、何萬噸といふ軍艦は、幾隻となく進水式場に浮び出たのであつた。學者の仕事は地味である。目覺しく世人を驚かすやうなことは無い。二君が拮据十餘年の編纂事業も、靜かな一室に靜かに行はれたのである。けれども、一たびその室に入つて山成す材料を見上げるものは、何人と雖もその難事業たることを承認せずには居られ

ぬ。又編纂者の決心と根氣とを尊敬せずには居られぬ。さうして、それが決して學者の閑事業では無くして、實は國家的大事業であつたことに考へ到らなければならぬ。國民精神の基礎、隨つて國家教育の根柢となる國語の調査、整理が現今に緊急であることはいふまでもない。國家は軍備ばかり進んでも一等國とはいはれぬ。あらゆる方面の發展は教育の力に頼らねばならず、教育の進歩も國語の普及が根本である。狭い編輯室に行はれて、何等世人の注意を惹かなかつた學者の研究が、實は絶大な國家的事業であつたといふことに於いて、學者の生命があり、學術の意義があるのである。十年前に比べて、鐵道の哩數や、軍艦の噸數の大いに増加したのを祝賀する人は、これと同時に、數隻の巡洋艦位で満足して居つた我が國語界が、十餘年後の今日、ここに一大戰艦にも譬ふべき本書を有

するに至つたことを驚歎し、歎美しなければならぬ。文物を整備するのは國家の誇であり、飾である。又精神界を支配する大きな武器である。完全な一辭書の存在することも、國民にとつての立派な強みになる。この一大産物が堅忍不拔な二君の手によつて成就せられたことは、友人たる余のいひ知らぬ喜悅を感じる所以である。この十年は國語界に於いても、亦無意味な十年ではなかつたのである。

學者の事業は、いつも世間と没交渉なものではない。専心な研究は書齋の中から起つても、世間は常に研究の題目となるものである。辭典の編纂に於いては、進歩して行く世間を一日も餘所に見て居る譯には行かぬ。

十年一昔の間には、國語そのものの中にも絶えず變遷が行はれ

テキクンハイソウシ
サツマタハコヲフク
スルモノアリ

て居る。それに注意するだけでも容易の業では無い。静寂な編輯室は、紛糾した實社會（その後の）と常に相往來して居るものである。幾多の困難にうち克つて、國民の覺知せぬ間に、その背後に大きな國家事業を建設せられた二君の勞苦は、今更述べるに及ばぬ。後世の人は、必ずこれを明治時代に企てられて、大正時代に完成せられた大事業の一つに數へるであらう。

余は二君の満足と喜悅とを察知すると同時に、今か今かと十餘年を待ち暮した同友と共に、まづ二君の成業を祝して一大白を浮べようと思ふのである。（芳賀矢一——大日本國語辭典序文）

二まはりにして、首にかくる。

二まはりにし、手首にかくる。

尺小説

良澤

蘭學者。前野氏。豐前中津藩醫。中津侯に仕へて江戸に居り、青木昆陽に蘭學を學び、後長崎に遊學す。享和三年十月歿す。(二二三八三年—二四六三年)

玄白

蘭學者。杉田氏。若狹小濱藩の醫。西玄哲、山脇東洋に學ぶ。最も意を外科に用ひ、解剖に精し。文化十四年歿す。(二二二九三年—二四七七年)

刑場

江戸の千住小塚原の刑場なり。

二一 蘭學事始

良澤、玄白等六人は打ち連れて觀臟の場所へ往つた。刑場の一部に蓆を以て粗末な假小屋が設けられてあつた。手醫師の何某が、與力や何かと一緒に待つて居た。

一人の老屠（屠師）は出刃（出刃）を手に持つと、無造作に屍體を切り開いて往つた。胸が第一に切り剖かれた。良澤も玄白もターヘルアナトミアの胸の繪圖を開いて、開かれて行く屍體の胸と一心に見比べてゐた。それが良澤と玄白とに取つて何と不思議であつたらう。出刃の切先に切られて行く骨の一つも筋の一つも、肉の間に網の如く走つて居る白い奇怪な線條も、白く浮き上つて居る脂肪も、胸郭一はいにひろがつて居る肺も、左肺の下からのぞいて居る眞赤な桃の

與力
徳川幕府の時諸奉行の配下に屬して、内外の諸事に當る卑役。ターヘルアナトミア
和蘭の解剖書。解體新書の原本なり。

實のやうな心の臓も、ターヘルアナトミアの繪圖と一分一點の違もなかつた。良澤も玄白も、他の四人も、深い感歎のために聲も出なかつた。

續いて腹が剖かれた。そこに見出された胃、奇怪な形にうづくまつて居る腸腸胃の陰に隠れてゐる名も知らぬ臟腑まで、和蘭圖と寸分の違もなかつた。老屠が出刃を持つ手を止めると、良澤ははじめて我に歸つたやうに叫んだ。

「至極ぢや、至極ぢや、蘭書の繪圖と寸分の違もござらぬ。和漢千載の諸説は、みな取るに足らぬ妄説と定まり申した。醫術はもはや和蘭に止めを刺し申した」

「至極ぢや、至極ぢや。」
皆は良澤の感激に聲を合はせた。

春泰
蘭學者。嶺氏。
良圓
蘭學者。鳥山氏。
玄適
蘭學者。小杉氏。
淳庵
蘭學者。中川氏。
徳川幕府の醫官。明和中平賀鳩溪と謀り火流布を作る。

刑場からの歸途春泰と良圓とは一足遅れたため、良澤と玄適と淳庵、玄白の四人連であつた。四人は同じ感激に浸つて居た。それは奇妙不思議な和蘭の醫術に對する讚歎の心であつた。刑場から六七町の間は黙々として銘銘自分自分の感激に浸つて居たが、淺草田圃にさしかかると、淳庵は堪へぬやうにいつた。

「今日の實驗只只驚き入るの外はない事でござる。かほどの事をこれまで心付かずに打ち過してゐたかと思へば、この上もなき

解體新書卷之一

若狹杉田玄白 翼 譯
同藩中川淳庵 麟 校
東都石川玄常 世通 參
官醫 東都桂川甫 周世民 閱

○解體大意篇第一
○夫解體之書、所以解體之法也。蓋說形體之名狀、及諸臟之内、外、一、身、之、主、用、矣。故其審之者、無如通判、見、其、其、次、無、如、

書 新 體 解

良澤
蘭字大成
理想主義
玄白
實用
現実主義
先驅者の熱意
快味

恥辱に存ずる。我我醫をもつて主君に仕へる者が、その術の基本とも申すべき人體の眞形をも心得ず、今日まで一日一日とその業を務め申したかと思へば、面目もない事でござる。何とぞ今日の實驗に本づき、大凡にても身體の眞理を辨へて醫をいたさば、醫をもつて天地間に身を立つる申譯にもなる事でござる。」

良澤も玄白も、玄適も、淳庵の述懐に同感せずには居られなかつた。玄白はその後を承けていつた。

「いかにも尤の仰ぢや、それにつけても、拙者は如何にも致して、このターヘルアナトミアの一卷を翻譯いたしたいものぢやと存ずる。これだに翻譯いたし申さば、身體内外のこと分明を得て、今日以後療治の上にも大益あることと存ずる。」

良澤も心からうち解けて居た。



前野良澤

の幸ぢや、幸ひ先年長崎留學のみぎり、蘭語少少は學んでござる程に、それを種といたし、共共このターヘルアナトミアに讀みかからうではござらぬか。」

といつた。

玄白も淳庵も玄適も手を拍つてそれに同じた。彼等は異常な感激で結び合はされた。

「然らば『善は急げ』と申す。明日より拙宅へお越しなされい。」

良澤はその大きい眼を輝かしながらいつた。

平河町
今の東京市麹町
區。

約の如くその翌日を初として、四人は平河町の良澤の家に月五
六回づつ相會した。良澤を除いた三人は、和蘭文字の二十五字さへ
最初は定かには覚えて居なかつた。良澤は三人の人人に蘭語の手
ほどきをした。彼はさすがに長崎へ留學した事があるだけに、多少
の蘭語と章句語脈のことも少しは心得て居たけれども、それは殆
どいふに足らなかつた。一月ばかり經つと、良澤が三人に教へる事
はもう何も残つて居なかつた。

三人の手ほどきが濟むと、四人は初めてターヘルアナトミアの
書に掛つたが、開卷第一の頁から、ただ茫洋として舵なき船の大洋
に乗り出したやうに、何處からとも手の付けやうがなく、あきれに
あきれて居る外はなかつた。が、二三枚めくつた所に、仰向けになつ
た人體全象の圖があつた。彼等は考へた。人體内景のことは知り

たいが、表部外象のことは、その名所も一一知つて居ることである
から、圖に於ける符號と、説の中の符號とを合はせ考へることが一
番取り付き易いことだと思つた。

かれらは眉、口、唇、耳、腹、股、踵などに付いて居る符號を、文章の中に
さがした。そして眉、口、唇などの詞を一つ一つ覚えて往つた。が、さう
して單語だけは分つても、前後の文句は、彼等の乏しい力では一向
に解しかねた。一句一章を春の長き一日考へ暮しても、彷彿として
あきらめられないことが屢あつた。四人が三日の間考へぬいて、や
つと解いたのは、眉とは目の上に生じたる毛なりといふ一句だつ
たりした。四人はそのたわいもない文句に哄笑しながらも、銘銘嬉
し涙の眼の中ににじんで來るのを感じずには居られなかつた。
眉から目と下つて鼻の處へ來たときに、四人は、鼻とはフルヘツ

ヘンドせるものなり」といふ一句に突き當つてしまつた。無論完全な辭書はなかつた。ただ良澤が長崎から持ち歸つた小冊子に、フルヘツヘンドの譯註があつた。それは、木の枝を斷ちたる後、そのあとフルヘツヘンドをなし、庭を掃除すれば、その塵土集まりてフルヘツヘンドをなす」といふ文句だつた。四人はその譯註を引き合はせても容易には解しかねた。

「フルヘツヘンド、フルヘツヘンド」。

四人は折折この言葉を口ずさみながら、巳の刻から申の刻まで考へぬいた。四人は目を見合はせたまま一語も交へずに考へぬいた。申の刻を過ぎた頃に、玄白が躍り上るやうにしてその膝頭を叩いていつた。

「解せ申した、解せ申した。方方かやうでござる。木の枝を斷ち申し

巳の刻
今の午前十時。
申の刻
今の午後四時。

連城の壁
趙の恵文王、
和の璧を獲、
秦の昭王十五城を以てこれに易へんと請ふ。これより連城の壁といふ。



白 玄 田 杉

たる跡癒え申せば、うづたかくなるでござらう。塵土集まればこれもうづたかくなるでござらう。されば鼻は面中にあつて堆起するものでござれば、フルヘツヘンドはうづたかかといふ意でござらうぞ。四人は手を拍つて喜び合つた。玄白の眼には涙が光つた。彼の喜は連城の壁を獲たよりも勝つて居た。が、神経などといふ言葉に至つては、一月考へ續けても分らなかつた。彼等は最初難解の言葉に接するごとに、丸に十文字を引いて印とした。それを轡十文字と呼んで居た。初一年の間、どの頁にもどの題にも、轡十文字が無數に散在したが、彼等の先驅者としての勇猛精進はすべてを征

漢句の末から始めて
漢業に根をのこして
生かす

次第に蔗を食
ふ
晉書に「顯愷之
每食甘蔗一常
自尾至本、人
或怪之愷之曰
漸入佳境」。

菊池寛
香川県高松市の
人。明治二十二
年生まる。文學
士。小説家。小
説戯曲の創作頗
る多し。雜誌文
藝春秋の主幹。

服せずには居なかつた。一箇月六七回の定日を怠なく守つた甲斐があつた。一年餘を過ぎた頃には、譯語の數も殖え、條句の脈も明かに、書中の轡十文字も殘少くかき消されて居た。
先驅者としての苦闘は、やがて先驅者のみが知る喜で酬いられて居た。語句の末が明かになるに隨つて、次第に蔗を食ふが如く、その中に含まれた先人未知の眞理の甘味が、彼等の心に染み付いて來た。

彼等は邦人未到の學問の沃土に、彼等のみが足を踏み入れ得る喜で、會集の期日ごとに、兒女子の祭見に行く心地で、夜の明くるのを待ちかねる程になつて居た。
(菊池寛——菊池寛全集)

二三 椰子の實 (島崎藤村)

島崎藤村
文學者。名は春
樹。長野縣木曾
の人。明治五年
二月生まる。初、
詩作に令名あり
しが、後小説に
轉ぜり。

名も知らぬ遠き島より、
流れ寄る椰子の實一つ。

ふるさとの岸を離れて、
なればそも浪にいく月。

もとの樹は生ひや茂れる、
枝はなほ蔭をやなせる

生ひや茂れる

われもまた渚を枕、
ひとり身の浮寝の旅ぞ。

實をとりて胸に當つれば、
あらたなり流離の憂。

海の日休の沈むを見れば、
たぎり落つ異郷の涙。

思ひやる八重の潮路、
いづれの日にか國に歸らん。

(藤村詩集)



椰子林

日にか歸ら
む
ゆ
初
相

二二 世界的市民

一郡の事に通ぜざれば完全なる村長たること難く、一縣の事に達せずんば申分なき市長たること難し。されば、世界的市民の資格なくして日本國民の資格のみを有せんこと、思ひも寄らぬ次第なり。

吾人が今ここに世界的市民たるべき教養の必要を説くは、日本國民の資格よりも、世界的市民の資格が大切なる爲にあらず。この資格なくんば、到底日本國民たるべき實を擧ぐる能はざるを認めればなり。換言すれば、世界的市民の教養は、日本國民たるべき資格の主なる要素たるを信ずればなり。
地球の幅員は、マルコ・ポロの時代に比して別段の差異なしと雖

マルコ、ポロ
伊太利の旅行
家。支那に來
りて、元の世
祖に仕ふ。(西
曆一二五四年
年) 一三二三

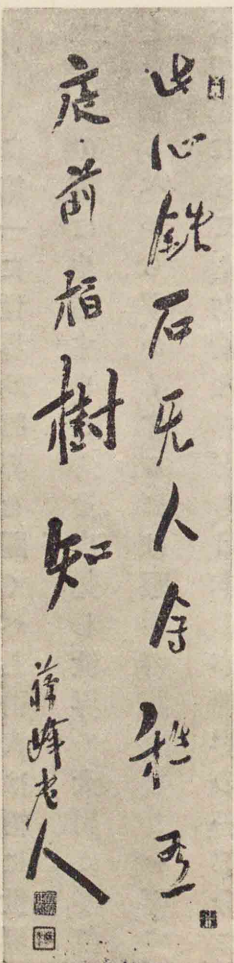
も運輸、通信の機關は月に日に時に刻にこれを縮小し、今や地球一彈丸の句は詩人の空想に止まらず、實際的意味を有することとなり、隨つて實際的壓迫は潮の涌くが如く、各國いづれも一國を以て競争の單位となし、以て商工業、海陸軍、その他百般の事に相努めつつあり。これ實に宇内の變局にして、苟も國民としてこれに處せんには、その教養も亦これに應ぜざるを得ず。

且それ我が國民が自國を愛するの熱誠なる、これを古今東西の歴史に徴するに、殆どその比を見ず。これ今日世界の各國民が驚歎しつゝある所にして、我が國民に愛國的教養の必要を説くは、石炭に向つて油を注ぐが如しといふ者あらん。然れども、時勢の推移に伴ふ思想の變遷はさのみ樂觀を許さざるものあり。但愛國心の教養にのみ熱中して、他を顧眄する餘裕なき時は、更に一種の面白か

孟軻をして云

孟子公孫丑章句に、「孟子曰、子誠齊人也。知管仲、晏子而已矣。」

此心鐵石無二
人會。祇有二庭
前柏樹知。
蘇峯老人



筆峯蘇宮德

らざる缺點を生ずべし。そは他ならず、世界の舞臺に於ける田舎漢の風味これのみ。若し孟軻をして今日にあらしめば、子は誠に日本人なり。富士山と琵琶湖とを知れるのみといふならん。もとより熱誠なる愛國心は田舎漢の特色なり。この特色は千古不磨たるべく、

又然らざるべからずと雖もこれのみにて當今の時局に處せん事は、危険の極と謂はざるを得ず。我が日本國民は、いまだ世界より正しく諒解せられざるが如く、世界をも正しく諒解せず。これ經世家の宜しく焦心すべき所にあらずや。一例を擧ぐれば、吾人は鄰國た

る支那に對しても、時としてはその勢力を過大視し、時としてはその勢力を過小視し、いまだ實價に就いて評定したること無きにあらずや。これが爲に我が國民の支那に對する態度も、朝變暮改を免れざりしにあらずや。

吾人は第一に世界的眼界を開くべし。吾人は恆に世界といふ一大社會の裏に生活することを自覺し、世界の大局より打算する^{をより見るとはめつ後}ことを忘るべからず。かくするには眼界の開豁なるを要す。吾人は日本國民たること勿論なれども、日本も亦世界の一部分にして、善にも惡にも、世界の^を大勢はその影響を日本に及しつある事を銘記せざるべからず。吾人は一國の輿論の畏るべきと共に、世界の輿論の時としては更に畏るべきことを知らざるべからず。而して一つの微小なる箇人の言行すらも、或は世界の隅より隅まで響き渡る

ことあり。故に吾人は常に世界といふ舞臺に立ち、世界各國民の視聽の中心に於いて働きつつあることを想起し、重大なる責任の念を以て行動するを要す。これ固より世界的眼界より來たる必然の結果なり。

第二に世界的知識を養ふべし。吾人は廣く世界を見渡すのみならずまた世界の主なる出來事、世界の主なる國民、世界の主なる人物等に就いて、相應の知識を有せざるべからず。およそ失策の十中八九は判斷の誤より生じ、誤斷の十中八九はその事情と事實とを偵察識得することの不備なるより來たる。如何に偉大なる國民と雖も、自己あるを知りて他を知らざる時は、意外の失敗を免れず。最近三十年に於いて、獨逸が世界的勢力となりし所以は、一つは官民相競うて世界的知識を吸収したるにあり、そのまた失敗したるも、

世界の 大勢を 誤認したるに ありき。

第三は世界的同情あるを要す。自己以外を敵視するは野蠻國なり。或は利害の衝突の爲に、一時は一國と一國と戦を交ふることもあり。然し、しかも戦争の情態は一時にして、人類相愛の道は永久不變なり。吾人は交戦國に向つてさへも、敵對すべき時間と範圍との制限内に於いてこそ敵對するなれ。その他に於いてこれを敵視すべき理由なし。況や自國以外を擧げて悉くこれを敵國視するが如きは、これ亡國の道のみ。我が國民の如きは、固より今日に於いてかかる陋態あるべき理なし。

しかも吾人は、概して我が國民の國際的同情の範圍のいまだ世界的ならざるを歎惜するものなり。我が國民を目して、今なほ所謂排外的思想の奴隸なりとするは、これ同胞に對する侮辱なり、讒誣なり。されどこれを目して深厚博大なる世界的同情に富むと謂ふは溢美なり、諛頌なり。正直にいへば、我が國民は漸く排外思想を脱して、いまだ世界的同情の襟度に進まずといふを當れりとす。

日本國民にして、眞に世界より誤解せられざらんと欲せば、寛裕濇厚の心を以て世界的同情を傾倒し、これによりて列國の眞相を諒解するに若くはなし。國家は人によりて組織せらるるとせば、國も亦人の如く血あり、肉あり。この肉や血や、冷かなる利害の打算のみにあらず、亦實に同情の熱火によりて相融合するを得るなり。故に世界的同情は、苟もこれを調和すべき一大常識だにあらば、決してその多きを厭はざるなり。

以上の三者あらば、稍以て世界的市民の資格に於いて不滿なきに庶幾かるべし。而して此の如くして、始めて日本國民の資格に於

いて、大いなる不足なしと謂ふべし。
大いなる國家は大いなる國民によりて立つ。大いなる國民はその眼界の廣きが如くその胸懷も亦寬なり。單に國家一時の利害より算するも、鎖國根性は最も不利益なる根性なり。況や國家は崇高なる道義的目的の爲に存在するものたるに於いてをや。

(徳富蘇峯—蘇峯文選)

徳富蘇峯
名は猪一郎。熊本縣の人。文久三年正月生まる。貴族院議員。久しく國民新聞社長として健筆を振ひしが、今は大阪毎日新聞、東京日日新聞の社賓たり。

日本國民も太平洋の大寶庫を開くを得ば、大國民の宏業ここに完成すといふを得ん。余故に曰はく、わが日本の將來は北にあらずして南にあり。大陸にあらずして海にあり。日本人民の注目すべきは太平洋を以てわが湖沼とする大業にあり」と。椰子樹の酒を生ずる處、芭蕉の子の累累として實る處、エメラルドの如き海水の淀む處、極樂鳥の舞ふ處、日本國民の偉大なる運命は封じてこの中にあり。(竹越三又)

二四 鷺江の月明

集美學校から厦門への歸である。

學校の煉瓦をここに荷揚したらしいと見える赤い粉のために、濱一面に赤くなつてゐる處へ出て、そこで待ちくたびれて、舟の中に晝寢してゐる舟人を喚び起した。舟人は汀を指さして不機嫌である。引汐の勢で歸らうと思つたのに、もう大分退いてしまつたからであらう。その罰といふわけでもあるまいが、逆風だからと舟の日覆を剥がれてしまつた。然しもう、ぼつぼつ雲が薄れかかつた太陽は、水の上ではそれ程堪へられなくはない。

我の舟は逆風のなかに帆を揚げてまぎりながら、厦門島の山陰を山に近く縫うて往つた。その爲に幾分か時間がかかつたけれ

集美學校
支那福建省厦門島の北端と相對する集美と稱する村にある學校。この地方の富豪某の設立せる私立學校にして、小學より大學まで備はれりといふ。

鷺江
廈門島を取り圍
める灣をいふ。
西湖
支那浙江省にあ
り。



佐藤 春夫

ども、私は決して退屈はしなかつた。いや退屈どころではない、私は私達の小舟を遅れさせて、水の上の夕暮を見せてくれたあの日のあのそよ吹く逆風に感謝しなければならぬやうに思ふ。それ程その日の鷺江の夕暮は美しく楽しいものであつた。私はその夕方以來、支那の沿海地方では鷺江の風光が第一だといふ定評や、西湖もこれには及ばないといった人の言を信ずるやうになつた。西湖も他の地方をも知らない私ではあるが。

眞實私は、あの日の夕方ほど自分の趣味にしつくり合つた自然を、その前にもその後にも、まだ一度も見たことはない。

水路を半分も來て、幾つもの小島が見え出す處に來た頃には、夕

入日

荷葉皴
南宋派の畫法に
して、山の巖を
描く一種の筆
法。



日は目に見えながらゆるゆると西に春き傾いた。西方の山山には、かすかな夕雲が煙のやうに消えて行くところであつた。羅を脱ぎ去つたこの幾重にも連つた山山や、複雑に突入した鷺江の河べの高低が、入日の光に濃い影を荷葉皴に刻んだが、やがて濃淡さまざまに、紫や藍や紺青や黄や赤金や、説き盡し難い色に幾重にも霞みながら、しかもそれは刻々に、物憂く氣まぐれな氣分のやうに捕捉しがたく變化した。——日脚が靜かに移つて行くがままに。

我々の舟がまだ掻き亂さない水の行手には、金が溶けて流れた。水の上の金色が紅く變る頃には、山山はその裾の方からごく少しづつ灰色になり、さて暗くなつて行く。日は落ちたが、餘映は虹の紅い部分のやうな茜で空に残つてゐる。それもやがて薄れる。どういふ大氣の理由であるか、その夕映が赤い天の川のやうに一筋に、入

月の

日のあつた山の頂から遠く東へ流れてゐる。その夕映の消える處を尋ねて東の方を振り返ると、そこには低い山の僅に寸ばかり上にかすかに淡い満月が大きくふわりと漂うて居るではないか。そのつつましやかさに忘れられて居た月は、刻刻に白さを増して来た。まだ光とはいへない白さである。その光のない月の下、その我々の舟に近い山裾の干潮したあたりに、一羽の白鷺が立つてゐる。この脊の高い多少の神韻を帯びた鳥を白く浮き出させて、ほのかな夕闇は迫つてゐる。白鷺はうなだれて佇んでゐたが、まだ黒く濡れて見える磯の上を、何か喙むと、さて軽く飛び立つて、我々の小舟の上を稍高く、然しその羽音をけはひに感じさせて横切つたが、すぐに消え去つた。濱にはただ何やら灌木が黒く這つて居る。この磯に沿うて牡蠣を養殖する爲とかで、細長い切石が無數に並べられ

(2)

てあるのが、廢址か何かのやうに怪しい。月の白さは靜かに光になつて來た。

「や、見給へ。」

案内役の鄭君が舟のゆく手を指す。一間程の黒いものが、まだほのかに明るい水の面に、ほつかり小舟の底のやうな形に浮くと見れば沈み、沈んで浮き、三度浮いて、さて見えなくなつた。

「見たか。」

「見た。何だらう、あれは。」

「神魚——白鰐。鄭君は私の懷中記事冊へ大きく書きながら、かう讀んだ。白鰐は普通十呎以上ある。鷺江の到る處にあのやうに形を見せるが、舟が近づけばどんな小舟にでも必ず姿を潜めて、古來一度も舟を害つたことはない。それゆゑ人人はこれを神魚と呼んで、感謝

鄭君
廈門生まれの青年の名。

神魚

③
 し尊敬してゐると鄭君はいつた。そんな説明は今どうでもいい。靜かに見給へ、月はだんだん眞珠の光になつて來た。月光のまづ浮んだのは、遠い西の岸の小暗い山かげの小波の上であつた。さうして私の心は、譬へば月の光とともに匂ひ出すといふ月見草の花のやうに、夕月と夕月の統治する四邊の風景とに魅了された。水上の薄暮は徐に迫つて、薄暗がりの中で、すべては哀婉で、幽雅で、更に孤獨な白鷺や、古怪な神魚によつて一味の凄異を脈搏たせながら、限なく深い詩情のなかに暮れ悩んでゐる。しかもどんな勝れた詩人の詩も、どんな作家の美しい物語も、情趣の限なき密度に於いて、微妙な推移の効果に於いて、今日の鷺江の夕暮の情趣にどうして及ばうか。

廈門市街の一角が灰色に見えて來た。然し其處にともされた街

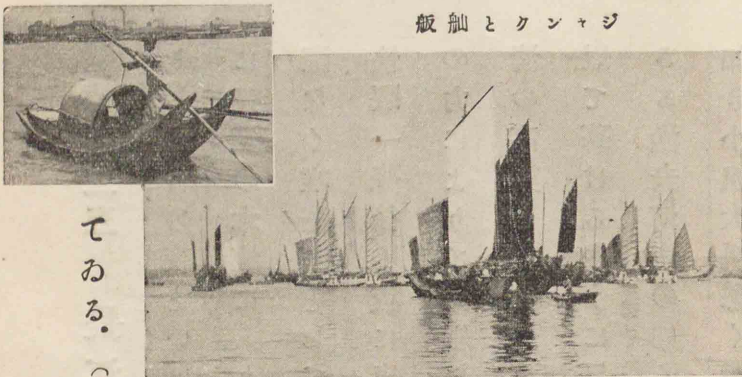
ターナー
 英國の風景畫家
 (西曆一七五一年—一八五一年)

④

ジャンク
 Junk

佐藤春夫
 文學者。明治二十五年四月生まる。和歌山縣新宮町の人。

舢舨とクンヤジ



てゐる。

(佐藤春夫—南方紀行)

の灯は、まだ暮れ切らない大氣の中に空しくぼやけてゐる。これはターナーの構圖である。西岸の山陰に浮んだ月光は、今はくつきりとゆたかな銀箔になつて來た。どこからの歸帆であらうか、西の方から私達の路を遠く横ぎつて、廈門の舟著場の方へ急ぐ舢舨がある。

私達の舟人は帆を卷いて漕ぎ出した。幾艘かのジャンクの下を抜けると、廈門の市街の灯がもうかがやかしく水に映り初めて、月影は今から冷く降り灑がうと用意し

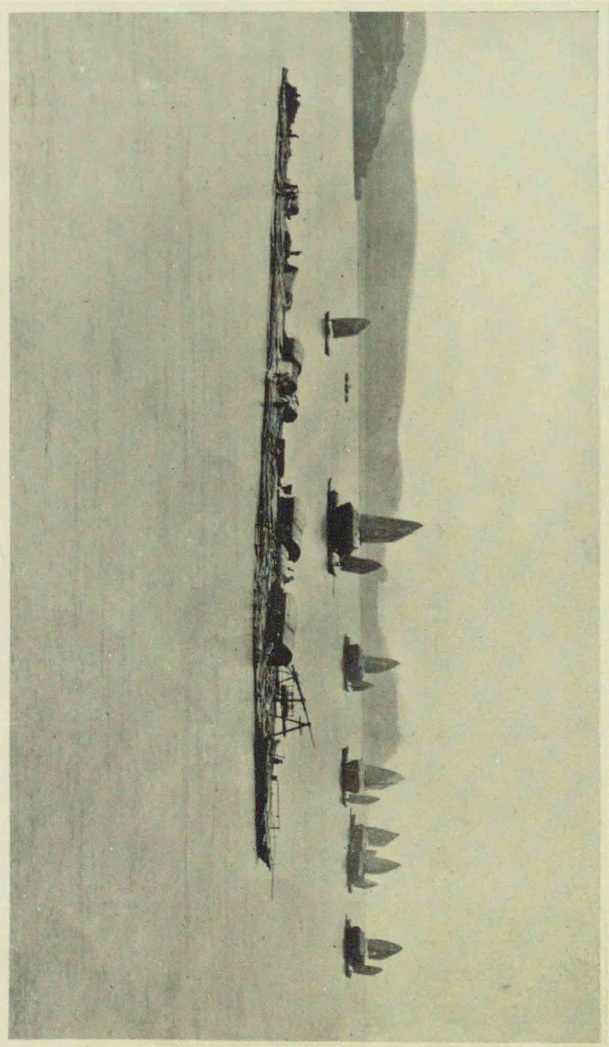
二五 長江湖航

長江
支那第一の大河
揚子江をいふ。

七月九日の夜といはんか、十日の曉といはんか、わが船はすでに長江の本流に入り候ひぬ。江といはんか、海といはんか、極目際なく、唯茫茫として月影の水心に涌くあるのみに候。

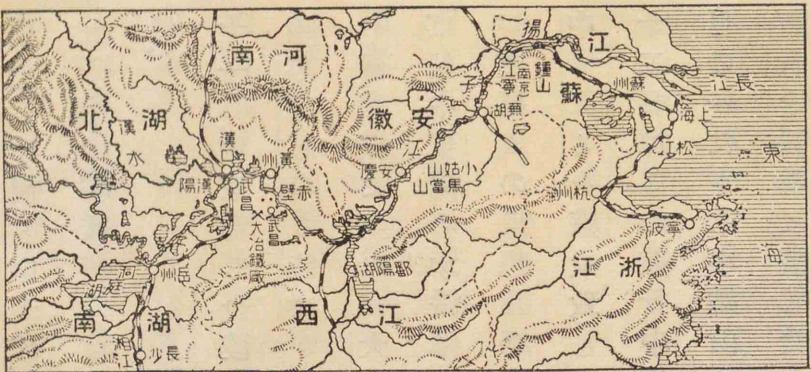
快眠一覺後、甲板に出づれば、兩岸の風色、わが精銳なる雙眼鏡の力によりて仔細に辨ぜられ候。叢生したる蘆葦は定めて北清の高梁とその長を競ふべく、柳蔭の民舎は概ねその蘆葦を以て葺けるやうに見え候。水邊に眠る水牛、水草の中に魚をあさる漁夫、河童の如く堤外の小流に出没する兒童、往來織るが如き小帆大帆、悉く指顧の間にこれあり候。

眞に長江の大には何といひても低頭平身せざるを得ず候。こ



長江の筏

夕立の空より
 云云
 初二句は「露お
 かのかたもあり
 けり」。
 太田道灌
 名は持資。關東
 管領扇が谷上杉
 氏の執權。(一九
 九二年—二一四
 六年)
 漢江
 陝西省に發し、
 漢口に至りて揚
 子江に合す。



長江地圖

の邊は四十清里の河幅なる由。即今、
 増水四十尺以上と承はり及び候へ
 ば、まさにこれ長江の最大膨脹の期
 に御座候。
 渺渺^{ミョミョ}奔波與岸平。半江^{ハンカウ}雷雨半
 江晴。布帆多在柳梢上。掠^{スグ}水、
 沙禽不識名。
 これは全く實景にて一字の虚構な
 く、夕立の空より廣き武藏野の原と
 太田道灌が詠ぜし句、今更思ひ出さ
 れ申し候。ただ「與岸平」と申せども、時
 としては岸上に溢れ申し候。漢江の

平水五十尺と申せば、今日にては九十尺になり居り候筈、一萬五千噸の戦艦が六百哩の上に溯るも、決して不思議にあらず候。

十一日、南京即ち金陵に著したる頃は、江雨霏霏として、王荊公の夢寐忘るる能はざりし鍾山は、江雲模糊の裏に半ば封ぜられ候。蕪湖に至れば大雨盆を傾くるが如くにて候。所在なければ船中備附の水滸傳を讀みて閑を消し候。今更の如く、水滸傳が支那人の思想及び生活を敘するにおいて要領を得、肯綮に中りたるを感歎致し候。

十二日はこの航行中最も獲物多き日にて候。唐宋詩人の好題目の一たりし小姑山は、縦令増水の爲に平生よりも深くその腰骨を洪濤に没したりとするも、尙滾滾たる長江の砥柱とし

金陵

江蘇省江寧府。

王荊公

名は安石。宋の政治家、文學者。

(西曆一〇二一年—一〇八六年)

蕪湖

安徽省太平府に屬す。長江の右岸。

水滸傳

有名なる小説。元の施耐庵の撰。

陸龜蒙
唐の文人。字は魯望、江湖散人と號す。

大冶鐵山

湖北省武昌の東南にあり。

漢口

湖北省漢陽府に屬す。

武昌

湖北省の首府。

漢陽

湖北省。

長沙

湖南省の首府。洞庭湖より浙江を溯る六十里の左岸にあり。

てその中心に屹立致し居り候。陸龜蒙が天下の險と稱せし馬當山は、球磨川の槍倒を大仕掛にしたるものにして、江流廻環小渦、大渦、大大渦、その下に千轉萬合しつつある、人をして毛髮を豎てしめ候。

十三日は大冶の鐵山を遙見し、薄暮漢口に著し候。漢口は武昌府と江を隔てて相對し、恰も馬關と門司との如く、更に漢水の來會する頭に漢陽ありて、鼎立の姿をなし、洵に南支の雄鎮に候。著船と同時に湖南汽船會社の某氏來船し、同夜直に同社の湘南丸が、長沙に向けて發航するにつき同行すべきかとの誘引あり。一議に及ばず、渡に舟の心地にて直に乗り移り申し候。十四日、目覺むれば身は湘南丸の上において、漢口上流の揚子江を溯りつつあり。この邊、江口より六百餘哩の上なれども、江

の幅はなほ一哩以上或は二哩にも及ぶべく、江水は依然淼茫たり。江岸には隨處に水牛群をなし、兒童の水牛を驅使するや、狗兒を扱ふよりも容易なるが如し。耕作には固よりこれを使用致し居り候。その江畔の柳蔭に、兒童が牛背に腰をかけて悠然たるさまは、宛然一幅の畫に候。而して増水の痕は隨處にあり、根こぎの柳樹など、到る處に倒れ居り候。

十五日、起きて江水を見れば、既に碧に澄みをり。船は洞庭湖に入りたるにて候。九日以來、赤味噌汁の如き江水の中に生活したるこの身に取ては、いかにも嬉しく覺えられ候。直に湖水を汲みてこれに浴し、心身爽快に相成り申し候。岳陽樓も過ぎ、君山も過ぎ、須臾に湘江に入れば、碧いよいよ碧に、流も漸く縮まりて、はじめて河らしく感じ申し候。

洞庭湖

湖南省の北部にある大湖。

岳陽樓

岳州城西の門樓なり。

君山

洞庭湖中の小島。

湘江

陝西省に發し、洞庭湖に注ぐ。

申すまでもなく洞庭湖の見物は、大筏に候。一箇の筏の上には十數軒の家ありて、豚も飼ひ、鶏も飼ひ候。時としては野菜畑さへこれあり、遠く望めば一村落の如くに候。さなり、一村落が筏となりて洞庭を過ぎ、漢口を経て蕪湖に達し、其處にて豚、鶏等悉皆賣り捌く由に候。(徳富蘇峯 七十八日遊記)

兩山けはしく峙ちて、峯は頭の上に望み、流殊にせまりて細く、怪巖峨峨として、屏風をたためるが如く、壁を立てたるが如く、龍の騰るが如く、獅子の踞るが如く、或は雜樹蔭茂れる中に入るかとすれば、松杉森森たる岸に臨む。或は山吹の散りかかりたる、躑躅の咲きそろひたる、山櫻のものが梢とあらはれ出でたる、千景萬色、眸をめぐらすにしたがひ、兩山只走るが如くにして、李太白が「輕舟已過萬重山」と詠ぜしも、かかる境にやとおもひ出でらる。(橋南翁)

二六 扇の的

さる程に阿波讃岐に、平家を背いて源氏を待ちける兵共、あそこ
 の嶺、ここの洞より十四五騎、二十騎うち連れうち連れ馳せくる程
 に、判官程なく三百餘騎になり給ひぬ。今日は日暮れぬ。勝負を決す
 べからずとて、源平互に引き退く處に、沖より尋常に飾つたる小船
 一艘、汀へ向つて漕ぎよせ、渚より七八段許にもなりしかば、船を横
 様になす。あれはいかにと見る處に、船の中より年の齡十八九許な
 る女房の、柳の五衣に紅の袴著たるが、皆紅の扇の目いだしたるを
 船のせがひに挟み立て、陸に向ひてぞ招きける。判官、後藤兵衛實基
 を召して、あれはいかにと宣へば、射よとにてこそ候ふらめ。但大將
 の矢面に進んで御覽ぜられむ處を、手だれにねらうて射落せとの

判官
 源義經のこと。
 檢非違使の尉な
 りければいふ。

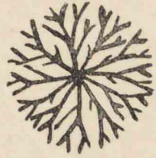
謀とこそ存
 じ候へ

謀とこそ存じ候へ。さりながら扇をば射させらるべうもや候ふら
 むと申しければ、判官、身方に射つべき仁は誰かあると問ひ給へば、
 「手だれども多う候ふ中に、下野國の住人那須太郎資高が子に與一
 宗高こそ、小兵では候へども手は利いて候ふ」と申す。判官、證據があ
 るか、さん候ふ。かけ鳥などを争うて、三つに二つは必ず射落し候ふ
 と申しければ、判官、さらば與一呼べとて召されけり。

與一その頃は、いまだ二十ばかりの男なり。褐に赤地の錦を以て
 袵、端袖いろへたる直垂に、萌黄威の鎧著て、足白の太刀を帶き、二十
 四さいたる截生の矢負ひ、薄截生に鷹の羽割り合はせて、矧いだり
 けるぬための鎬をぞさし添へたる。滋籐の弓脇に挟み、冑をば脱い
 で高紐に懸け、判官の御前に畏まる。判官、いかに與一。あの扇の眞中
 射て敵に見物せさせよかしと宣へば、與一、仕つつとも存じ候はず。

鎬をぞ添へ
 たる

べうもや一候
ふらむ

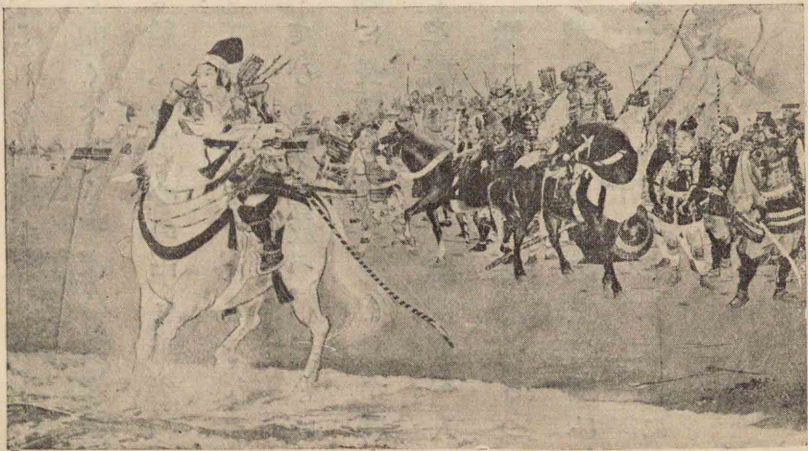


まろほや

これを射損ずるものならば、長き身方の御弓矢の瑕にて候ふべし。一定仕らうずる仁に仰せ附けらるべうもや候ふらむと申しければ、判官大いに怒つて、今度鎌倉を立つて西國へ向はむずる者共は、皆義經が下知を背くべからず、それに少しも仔細を存ぜむ人人は、これよりとうとう鎌倉へ歸らるべしとぞ宣ひける。與一、重ねて辭せば悪しかりなむとや思ひけむ。さ候はば、外れむをば存じ候はず。御説で候へば仕つてこそ見候はめとて御前をまかり立ち、黒き馬の太う逞ましきに、まろほや摺つたる金覆輪の鞍置いて乗つたりけるが、弓取り直し手綱かいくつて、汀へ向つてぞ歩ませける。身方の兵共、與一のうしろを遙に見送つて、この若者、一定仕らうずると覺え候ふと申しければ、判官も頼もしげにぞ見給ひける。矢頃少し遠かりければ、海の中一段ばかり打ち入つたりけれど

日光權現
栃木縣日光山な
る二荒神社な
り。事代主命を
祭る。
宇都宮
同縣宇都宮なる
二荒神社。
湯泉大明神
同縣那須郡那須
山にあり。

も、なほ扇の間は七段ばかりもあらむところ見えたりけれ。頃は二月十八日酉の刻ばかりの事なるに、折節北風烈しう吹きければ、磯打つ波も高かりけり。船はゆり上げゆり据ゑ漂へば、扇も串に定まらず閃いたり。澳には平家船を一面に並べて見物す。陸には源氏轡を並べてこれを見る。いづれもいづれも晴ならずといふ事なし。與一目を塞いで、南無八幡大菩薩、別しては我が國の神明、日光權現、宇都宮、那須湯泉大明神、願はく



(筆三月形尾) 一 與 須 那

さつとぞ散
つたりける

はあの扇の眞中射させてたばせ給へ。これを射損ずるものならば、弓切り折り自害して、人に二たび面を向くべからず。今一度本國へ歸さむと思し召さば、この矢はづさせ給ふなと心の中に祈念して、目を見開いたれば、風も少し吹き弱つて、扇も射よげにこそなつたりけれ。與一鏑を取つて番ひ、よつびいてひやうと放つ。小兵といふ條、十二束三伏、弓は強し、鏑は浦響く程に長鳴して、あやまたず扇の要ぎは一寸ばかりおいて、ひいふつとぞ射切つたる。鏑は海へ入りければ、扇は空へぞ揚りける。春風に一揉二揉もまれて、海へさつとぞ散つたりける。皆紅の扇の夕日のかがやくに、白波の上に漂ひ浮きつ沈みつ流れけるを、澳には平家舷をたたいて感じたり。陸には源氏箴をたたいてとよめきけり。(平家物語)

二七 光

一、

善人は、人生には餘に善人の多いことに氣付くであらう。隨つて善人の見た人生には光がある。

悪人は、人生には餘に多くの悪人があることに氣付くであらう。隨つて悪人の見た人生には光がない。

正直な人の眼には、人間も家畜も正直なものとして映るであらう。不正直な人の眼には、人間も家畜も不正直なものとして映るに違ない。

實際一面から見れば、人間程醜いものはないかも知れぬ。けれども、同時にまた人間程美しいものが何處にあらう。人間以外に何處

キリスト
 ユダヤに生ま
 る。キリスト教
 の開祖。西暦前
 四年―二九年）
 釋迦
 名は悉達多。中
 印度迦毘羅城主
 淨飯王の子。佛
 教の開祖。西曆
 前五五七年―前
 四七七年）

にキリストの愛が生まれたか、釋迦の慈悲が生まれたか。私達の村に善人がゐないにしても、それが決して人生を呪ふ理由にはならない。隣の村を探して見るがいい。日本に居なければ世界中を探して見るがいい。現代の世界にゐなければ、人間の過去の記録をたづねて見るがいい。未來の世界に待つがいい。

たとへ千人の詐欺漢に出逢つても、唯一人の正直な心の美しい人を見出すことが出来れば、その人は幸福である。

只一人の正直な人心の美しい人は、私達の人生をすつかり明るくしてくれる。もしこの世界に心の美しい人、親切な人、正直な人がゐなかつたとしたら、世界はどんなにか寂しいことであらう。唯私達の心さへ美しかつたら、親切であつたら、正直であつたら、世界には現在すぐ自分の周圍にあり餘るほど心の美しい人、親切な人達が

類は類を以てあつまる
 徳は孤ならず
 人は觀
 衆天家
 厭世家

が生きてゐる。

二、

宗教が考へられ、無我の愛が考へられ、親鸞が考へられることはたしかにいい事である。然しながら、この種の流行的思想は、往々宗教の本質的なものを取り逃す恐がある。宗教の深みまでたどり著くだけの執著や苦闘を避けて、淺く見きはめをつける弊がある。この事は、私達がお互に注意しなければならぬことである。

どのやうな宗教上のあり難い言葉も、他人の手によつて調理せられ、匙を持つて私達の口に移されたのでは、何のたしにもならない。宗教は想像でもなく、いい加減の見當をつける事でもない。宗教はどこまでも體驗的でなければならぬ、實感的でなければならぬ。宗教上の言葉も眞理も、自分自身に苦しみ抜いて生み出したもの

親鸞
 一向宗の祖。本願寺の開基。日野有範の子。弘長二年十一月寂す。（一八三三―一九二二）

でなければならぬ。

一日には一日の救がなければならぬ。私達は今日の救を持つ爲に今日は苦しまなければならぬ、最も深く端的に苦しまなければならぬ。今日の苦を明日に遺して置いてはならぬ。明日はもつと大きな新しい苦痛を持たなければならぬ。

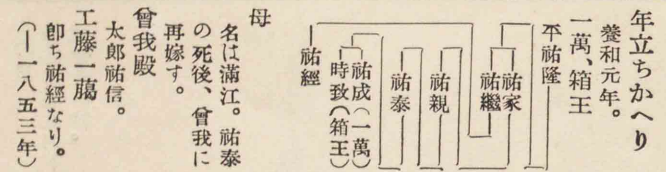
自分は救はれた道心者だと思つてゐる人、自分は貧しい人人の友人だと思つてゐる人達で、存外怠惰者があり、利己的な人があり、人間らしくない人があり、不遜な人がある。

「自分は人類のために働き、社會の爲に盡してゐる」と言明して仕事をやつてゐる人人に限つて、不愉快なところがある、憑物がしてゐる、妙な我がある、えらがりがある。キリストのいはゆる「巷に角笛を吹く人」である。(吉田絃二郎「草光」)

吉田絃二郎

本名源次郎。佐賀縣の人。明治十九年一月生まる。

二八 空ゆく雁



新玉の年立ちかへり、一萬は九つ、箱王は七つにぞなりにける。ある夕ぐれ、箱王は母の膝の上にはたはぶれながら、いかに母御前、父はいづこにおはしますぞや、その佛は何國にましますぞや、往きて拜み奉らばや、母御前いざさせ給へ」といひければ、遙に忘れたる來し方も、今更思ひ出されて、消え入るばかりに思はれて、母泣く泣く宣ひけるは、「あの曾我殿こそ、おのれ等が父にてあれ」と心強く語らひけれども、涙に咽びて陳じやる方ぞなかりける。箱王重ねて申しけるは、「父御前はまことやらむ、狩場より歸り給ふ道にて、工藤一藤とやらむに射られて死に給ひぬ」と、兄御前は語らせ給ふぞや、當時鎌倉殿のきり者にて、鎌倉より伊豆へ下る時もあり、伊豆より鎌倉へ

この里
神奈川縣足柄下
郡曾我中村。

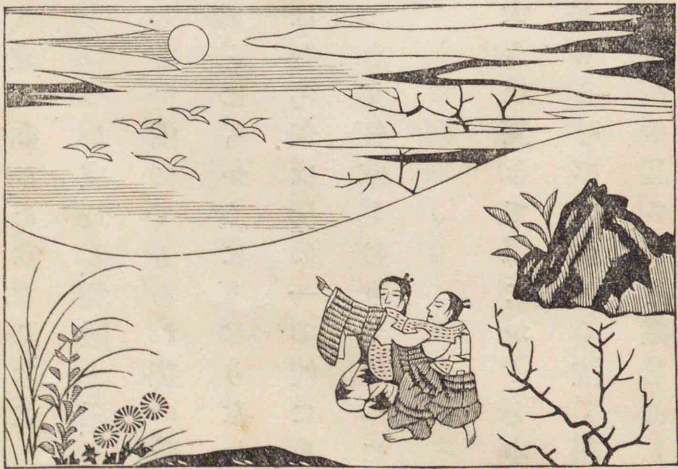
上る時もありとや。我等をも殺さむとや思ふらむ。我等がこの里に在りと知らずや過ぐらむなどおとなしく語りければ、母よりはじめて女房達まで、皆袖をぞ絞りける。

河津殿
祐泰。伊東祐親
の第三子。祐經
の臣下に討た
る。

かくて夏も過ぎ秋も闌け、九月十三夜の月隈もなかりけるに、兄弟二人庭に出でて遊びあたるに、五つ連れたる雁がねの南をさして飛びけるを見て、一萬申しけるは、あれ見給へ箱王殿。空を飛ぶ翼も皆別の翼ぞ交へざりける。五つ連れたる鳥の中に、一つは父、一つは母、三つは子どもにてぞあるらむ。物いはぬ鳥類すらかくの如し。我等は人倫に生まれながら、和殿は弟、我は兄、母は實の母なれども、曾我殿は實の父にてましまさぬこそ悲しけれ。我等が父をば河津殿と申してありきとかや。父だにも世におはしまさば、馬鞍をも賜はり、弓矢をも持ちて、今ぞ思ふやうに物を射ありきなむ。我等より

人もこそ聞
け

幼き者にて、馬鞍、弓矢をもて物を射ありくことの羨ましきよ。これらの事ども思ひ續くれば、いつより今宵は父御前の戀しくおはしますぞやとて、袖に顔をさし入れてさめざめと泣きければ、弟もござかしく顔を合はせて泣き居たり。一萬の乳母の女房これを聞きて、あなあさまし、人もこそ聞け。いかに和上藤達夜も更けぬるに、さやうにてはおはするぞ。とくとく入らせ給へ」と怖しげにいひければ、二人の者は門外へ逃げ出でて、思ふやうに飽くまで泣きて後に、内に入りにつけり。



丹線本木活版會我物語挿繪

或時兄弟は竹の小弓に薄矧うすきりの小矢を取り添へて、遠侍に出でて遊びけるが、明障子のありけるに二人立ち向ひ、あなたこなたへ射通して一萬箱王に申しけるは、我等もいつか成長し、和殿十三、われは十五にだにもなるならば、如何ならむ野山にてもあれ、親の敵祐經をかくの如く刺し合ひて射取りて、とにもかくにもなりなむ。和殿も弓よく射習ひ給へ。われも射習はむ。弓矢は男の一の能にあるなるぞ」といひければ、弟も打ちうなづきて領掌しけり。年ばへには怖しきことかなと、人人思ひけり。

一萬が乳母この由を聞き知りて、大きに驚きて母にかくと申しければ、母も大きに仰天し、二人の子どもを呼び寄せ、泣く泣く語られるは、もし人の耳に入りなばよかるべきかおのれ等が祖父伊東入

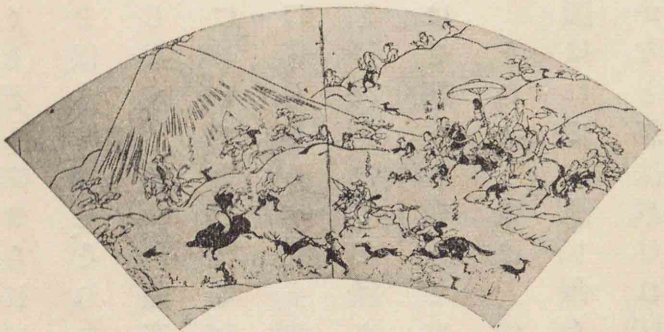
伊東入道
祐親。(一八四〇年)

千鶴御前

母は祐親の女。
松川が淵
静岡縣田方郡伊
東にあり。

石橋山の戦

治承四年八月な
り。石橋山は、
神奈川縣足柄下
郡にあり。
土肥の杉山
同郡土肥の山
谷、石橋山の南
にあり。
梶原景時
(一八六〇年)



(集梁棟屋松) 狩 卷 の 士 富

道殿は、當鎌倉殿の若君千鶴御前を松川が淵に沈め奉りし故に、御敵とあつて、先年伊東の館において失はれ給ひぬ。おのれ等かかる謀叛人の孫なれば、敵左衛門尉上の御敵に申しなして失はるべし。その時千度百度悲しむともかなふべきか。そのうへ汝等が鎌倉殿へ召されし時も、曾我殿歎き申してとどまりたり。その故は、鎌倉殿石橋山の合戦に打ち負けて土肥の杉山へ入らせ給ひし時、梶原景時と曾我殿と二人、心を合はせて助け奉りし故に、駿河國八郡の大名になされし、その御恩を皆返しまゐらせて、「二人の幼き者どもを助けて給はらむ」と申されけ

況や—おいて
をや

れば、鎌倉殿憐ませ給ひて、『それ程の志ならば、二人の子供、祐信に預くるぞ』と仰せられける故にこそ、汝等も安穩にて今まで希有の命を保ちたるぞ。それに就きて、曾我殿の芳恩をば生生世世にも報じ盡すべきか。鳥類畜類にても恩を知るところを聞け。況や汝等人倫においてをや。然るを却つて曾我殿に歎を與へむこと、返す返すも口惜しかるべし。その恩を報ぜむと思はば、速に謀叛をとどむべしと口説きたてて誠められければ、二人の子どもも目と目とを見合はせ、顔うち赤めて立ちにけり。

それより後は、人の聞かぬ處にては内内談議しけれども、人目に顯はれては語り合ふこともなし。母も内内怖しき者どもの心ざまかなと思はれければ、弟の箱王をば出家にせむとぞ思はれける。

(曾我物語)

せむとぞ—思
はれける

二九 路傍に寝てゐる青年

(劇の始まる前に老翁に扮した役者が出て、左の開場詞を多少調子のある言葉で述べる。)

浩繁なる大自然の書の
わづか一二ページをのみ
拾ひ読みする我等人間は、
現にわが運命に影響して、
遂にその最後の歸趨をも決する
幾多の重大なる出來事をさへも、
大抵は只不完全に意識し得るに過ぎず。
いはんや有形又は無形の、何等の結果をも

われらが身の上に齎さずして去れる出來事をや。
それらは如何に我が身近にて起るとも
われらが意識の鏡には、
いささかの影をだに映さで過ぎ行く。
あはれ！
かくてこそ世はなかなか
過ぎよかりけれ！
若しもあらゆる小さき出來事が、
夢にはた現に、
事ごとに時ごとに
われらが意識を動かさば、
人の世はあまりに空望多く、

またあまりに杞憂多く、
束の間も静ごころあらし。
このことわりを
ここに眠れる青年の上に見られよ。

場所、戶外。 時、夏午後三時過。

上手に森その前の方に特に大きな楓の木が一本、四方に枝を張り、稍小高くよくよかに盛り上つてゐる芝地を掩うて、天然の四阿を形造つてゐる。その根方に、多少の人工の加はつた清水井戸があり、水がいかにも涼しげにぶくぶくと吹き出してをり、そこには可憐な夏草がいろいろ咲き亂れてゐる。上手の奥から下手へ掛けて里道。里道の向は田圃。田圃の向は遠山。

楓の根方に、大學生らしい一人の青年、登山旅行中であるらしい服装だが、チョッキの胸をだらしなく開けてゐるので、胴巻が細袴すはばんの端から

はみ出してゐるのが見える。風呂敷包と振分の小鞆を枕にして、如何にも心地よささうに眠つてゐる。白いきれの附いた帽子と蝙蝠傘とが、すぐ傍に投げ出してある。

開場詞が済むと、汽笛の聲が聞え、やや遠くで汽車の走る音がする。やがて一しきり、色色の人物が里道を通つて行く。旅商人、野らへ通ふ村の女、自轉車に乗つた地方の會社員らしい男など、往來が一寸とぎれると、土地の商家の女主らしい老女と、小僧ではない小店員らしい少年とが通る。

少年は忽ち眠つてゐる青年を見附ける。

少 「やあ、あんなとこに！お上さん御覽なさい。あんなとこに學生さんが寝てますよ……どうだ！軒をかいてら、暢氣だなあ！」

女主 「ほんとにね！いい心持さうだねえ。きつと早立か何かで、恐しく草臥れなすつたんだよ。罪のない顔をしてよく寝てゐなさる

こと！まるで赤さんのやうだねえ。」

少 「やあ！鼻の穴へ蟻が這ひ込みさうにしてら、面白いなあ。手傳つて追ひ込んでやらうか？」

女主 「およしよ、およしよ。悪戯おしでない。ささ、おいでよ。おいでといへば……（青年に向つて）靜かにお休みなさい。さよなら。」

少年を促して女主は通り過ぎる。と行き違ひに下手から禁酒會の講師A、洋装にて、近郷の有志者らしいBC二人と、何か話しながら通りかかる。ふと青年を見つけて、

A 「あ、あれを御覽なさい。今の青年はあれだから困る。大概のわるい事はアルコールに原因するんですが、就中怠惰と放逸とは酒がもとです。たしかに昨夜飲み過ぎたんですな。あの年齢の者が眞晝間からああいふ爲體では、我が國の前途が憂慮に堪へなくなりませう。宿醉でせう。」

B 「旅行中の學生らしいですから、二日酔ぢやございませんまい。」

A 「いいや、二日酔です。あの顔の蒼白いのを御覽なさい。旅の恥は掻き捨て」などといふわるい諺があるから困る。存外柔和な顔をしてゐますが、かういふわるい癖があつちやあ、お袋が氣の毒です。甘やかし過ぎたんですな。困つたもんだ。然しちやうど今日の講話のいい一つの材料です。」

と手帳を出して何か二、三行書き留めつつ、B、Cと共に通り過ぎる。郵便脚夫が通る。

暫くして、品格のよい豪商らしい五十六七の男と、その妻女らしい四十三四の女と、何か話しながら徐に上手から出る。

豪商 「どうしてパンクしたかねえ。中中暑い。乗つてゐると自動車か風を切るから、さ程にも思はないが、かうして降りて歩いて見ると中中暑いねえ。（と汗を拭きながら）お！あそこがいい清水が出

てゐる。あの木の蔭へ往つて少し休んでゐよう。（青年を見つけて）おや！（と妻女を見返つて）御覽、あれを、いい心持さうに寝てゐる。」

妻 「まあ！學生ですね。ほんとにね、氣持がよささうに。」

豪 「おいおい……起しちや氣の毒だ。そつとこつちの方からおいで。そつと、そつと。」

二人は拔足して楓の一方の根方へ腰を掛ける。清水を手に掬んで嗽をしたり、ハンケチを浸したりする。豪商は青年をつくづく見やつて、

豪 「如何にも安樂さうだ。えらい軒をかいて寝てゐる。眠藥の力なんか借りないで以て、ああいふ風に眠られるやうだと嘸愉快だらう。ああいふ境界が金で買へるものなら、おれの財産を半分やつてもいいくらいのもんだ。（と溜息して）四時間と安眠の出来る夜が、月に何度あるだらう。羨ましいことだ。」

妻 「丈夫なんですわね、全く。」

豪 「丈夫なばかりぢやない。氣苦勞がないからだ。心にわだかまりがないからだ。」

妻 「いいえ、年が若いからですよ。つまり丈夫でさうして氣苦勞がなくつたつても、わたし達のやうな年になると、もうとてもああいふ風には眠られませんよ。おや日光があたつて來た。」

と、青年の顔へ日光がさすのを見て、垂れた楓の枝を組み合はせて、それを遮るやうにしてやりながら、なほ顔をつくづくながめて、

妻 「これはあなた、(と聲をひそめて)どこかの大學生ですわ。品のいい顔をしてゐますよ。……ねえ、どこことなく秀に似てゐるぢやありませんか。頤から頬へかけて、……額のはえ際の具合なんかそつくりですよ。若しや神様の御引合はせではないでせうか?。」

豪 「え、何が?。」

妻 「かうして思ひがけなく、ここでこの學生に逢ふといふのは、(と少し涙聲になつて)ああして一粒種の秀二郎には先立たれますし、せめてもの頼にしてゐた従弟はあの始末でせう。勿論わたくしはとうに諦めてはゐます。諦めてはゐますけれど、……でもねえ、成らうことなら……。」

學生は何かむにやむにやと寢言をいつて寢返をする。

妻 「おや!目を醒すかも知れませんが、ほんとに善良さうな顔をしてますわ。いつそ起して見ませうか。」

豪 (とめて)「何の爲に?。」

妻 「でも、秀に似てゐるぢやないの?。」

豪 「おいおい!輕卒な事をしちやいけません。どういふ性質の人

間だか分るものか。

妻 「だつて無邪氣さうな顔をしてますもの。ねえ、とにかく一寸起して話をして見ようぢやありませんか。」

豪 「おいおい、本氣かい。お前さん馬鹿な事をおいひでない。どこの者だか分りもしないのに。」

妻 「ですから起して聞いて見ませうよ。」

豪 「いいや、およしなさい。つまらん係合になるまいものでもないから。」

妻 「でもわたし……。」

その途端、自動車の運轉手らしい男出る。

運 「へい、お待遠さまでございました。もう直りましてございます。お召し下さいまし。」

豪 「もう大丈夫かい。」

運 「へい、もう大丈夫でございます。」

豪商は妻を促して歩み出す。運轉手つづく。妻女は残り惜しさうに、青年の方を見返り見返りついて入る。

暫く人足が絶える。

日がだんだん傾くらしい。

森の奥から人相のわるい男DとEと、二人が出て来る。

D (青年に目を附けて、小聲で)「おいおい！まんざらぢやないぜ、あの胴卷を見な。」

E 「なるほど、(四邊を見て)やるかな？だが、もうよつほど寝たらしい顔してるから、起きるかも知れんぜ。」

D 「なあに、起きたらやつちまふんだ。譯はねえ。(と腰の手拭をしごいて縊る真似をして見せて)これだ。」

E (うなづいて)「よし」。

二人は目くばせして青年に近寄り、まづその細袴の端からはみ出してゐる胴巻に手を掛けて、そつとそれを解かうとする。

この途端に、下手で荷車の掛聲が聞える。D Eは下手を見て舌打をして手をとどめ、一寸青年の傍を離れて清水を掬んで飲んだり何かしてゐる。

程なく荷車を挽いて車力が二人下手から出で、車をとどめ、同じく木蔭へ来て清水を掬ぶ。DとEは顔を見合はせ、いまいましいといふ思入をして下手へと去る。

やがて車力二人も車を挽いて去る

と、青年はふと目を醒す。やうやく起き上つて、目をこすりこすり大欠伸をしたが、日かげを見て驚いた體。

青年「おやおや！大變寢たらしいぞ。(と時計をみて)おや！もう五時だ」。

と大急ぎで身づくろひして、靴と風呂敷包とを振分にして、肩にして立ち去り、上手森のうしろへ稍足早に入る。
と近い處で村寺の鐘。

(開場詞を朗讀した老翁が又出て、次の閉場詞を讀む。)

あはれ、今去りし青年！

その命の流の上に、

大いなる富のまぼろしが、

黄金色の光を投げしを知らず、

またおそろしき死のまぼろしが、

その命の流を

血汐に染め成さんとせしをも知らず、

いとも心安げに二時三時を眠りつ。

